



本朝年代人物
前篇上





本朝
年代
人物
掌覽

人物掌覽例言

一自有人鑑及遜志之作。尋儒林隱逸列女孝子。武藝時人等之諸傳出。皆粲然傳播于世。然各書卷帙浩繁。不易攜帶。雖有如書畫一覽。唯是書畫耳。諸家則闕焉。不能無遺憾也。茲刻後編之作。雖未得其大成。總集諸家。而便於掌覽者。庶亦有補歟。

一前編起 神武帝朝。至 後小松帝朝。後編自 稱光帝朝。及 今上皇帝御代。通前後年數二千四百七十八年。收入者幾千幾百人。成冊者四卷。編修九十日而畢功。一事盡采於先賢所著。聊加余所知耳。故地理官職等稱呼。大氏依舊書之。則書中體裁應不一樣也。且戊申以淺學之力。獨手經營。於



其事約言之際。不得免漏誤舛差。博雅君子。請為之訂焉。

一要覽者。寓目了然的知歷代。因作年表。揭之上層。亦不敢煩查覽他書歟。

一標錄諸家者。目次則從字號。本文則取姓名。各就其所易知認之可也。

文政元年季冬

鶴峯戊申識

上層表目

人物表目

天子
后
皇
皇女
皇表
帝王
帝系

朝臣

將軍

將軍家族

將軍家臣

文學

歌人

孝子

義烈

列女

隱逸

方伎

叛臣

逆臣

名字索引

伊部

五十上ノ	君一才	祐覺	一ウ	宅嗣	三ウ	和泉	上ノ
家主	十九上ノ	雷	十九上ノ	妹	廿上ノ	石根	九ウ
五百上ノ	家忠	廿八上ノ	家繼	廿九上ノ	入鹿	上ノ	上ノ
伊企	廿三上ノ	盤手	五上ノ	伊尹	六上ノ	伊周	七ウ
家忠	九下ノ	家賢	廿下ノ	家隆	廿七下ノ	家安	廿八下ノ
五百下ノ	犬養	廿三下ノ	雷	早下ノ	石布	早下ノ	早下ノ
依	廿二下ノ	石床	五下ノ	池守	廿二上ノ	家貞	廿五上ノ
今	廿下ノ	波	上ノ	逸勢	四上ノ	果安	六上ノ
博德	一上ノ	春	上ノ	春風	廿上ノ	逸勢	廿九上ノ
波	上ノ	逸勢	四上ノ	果安	六上ノ	春城	五上ノ
果安	六上ノ	春津	四下ノ	張谷	早下ノ		

再部

日羅 上ノ
七才
新家 上ノ
廿二才

保部

本性 上ノ
九ウ
朴翁 上ノ
十六ウ
品治 上ノ
早九ウ
保昌 下ノ
八才

登部

年足	上ノ	豊成	一ウ	友足	四上ノ	時能	五上ノ
豊永	六上ノ	俊政	七上ノ	時行	十上ノ	時政	十上ノ
朝時	十上ノ	時頼	十二上ノ	時宗	十二上ノ	時輔	十二上ノ
時房	十三上ノ	朝直	十三上ノ	時直	十三上ノ	時村	十四上ノ
時益	十五上ノ	豊前	十七上ノ	富成	十九上ノ	朝政	廿上ノ
朝忠	廿上ノ	刀自	廿上ノ	朝盛	廿五上ノ	富麻	廿七上ノ
知盛	廿五上ノ	時忠	卅上ノ	知康	卅七上ノ	時致	卅九上ノ
友國	卅上ノ	時棟	卅五上ノ	知家	卅九上ノ	時氏	五十九上ノ
豊成	三下ノ	時平	五下ノ	利仁	六下ノ	齋信	八下ノ
朝俊	十下ノ	俊基	十下ノ	俊成	廿六下ノ	徳大	三十下ノ

遠景 下ノ 時治下三命 友則 下ノ 吳茲 下ノ

朝光 下ノ 俊賢 下ノ 俊房 下ノ 俊明 下ノ

具行 下ノ 俊頼 下ノ 俊綱 下ノ 朝雅 下ノ

根千 下ノ

知部

親衡 上ノ 千嶋 上ノ 定禪 上ノ 長彦 上ノ

智尊 上ノ 忠圓 上ノ 牛世 上ノ 長明 上ノ

親能 上ノ 親廣 上ノ 智能 下ノ 知積 下ノ

親光 下ノ 親朝 下ノ 親房 下ノ

利部

良忠 上ノ

奴部

糠蟲 上ノ

袁部

第狷 上ノ 第磯 上ノ 小隅 上ノ 男依 上ノ

第麻 上ノ 小田 上ノ 憶良 上ノ 岳守 下ノ

小黒 下ノ 緒嗣 下ノ 男麻 下ノ 尾興 下ノ

雄君 下ノ

和部

和氣 上ノ 王仁 上ノ 稚見 上ノ 綿麻 下ノ

加部

韓國 上ノ 和義 上ノ 河勝 上ノ 和氏 上ノ

景廉 上ノ 景時 上ノ 景季 上ノ 刑右 上ノ

門成 上ノ 河内 上ノ 兼盛 上ノ 金村 上ノ

金子 上ノ 兼光 上ノ 兼平 上ノ 金村 上ノ

景親 上ノ 景久 上ノ 景能 上ノ 兼任 上ノ

景光 上ノ 河成 上ノ 鎌足 下ノ 菅野 下ノ

兼通 下ノ 兼家 下ノ 兼光 下ノ 景清 下ノ

景家 十五ノ下ノ 兼實 十才ノ下ノ 金岡 卅下ノ 景盛 卅七下ノ
 菊田 卅下ノ 景繁 卅下ノ 堅麻 卅下ノ 兼康 卅下ノ
 麻呂 卅下ノ 景繼 卅下ノ 川繼 卅下ノ 梶成 卅下ノ
 勝長 卅下ノ 兼繼 卅下ノ

與部

義房 二上ノ 義盛 二上ノ 賴負 三上ノ 賴房 三上ノ
 義深 六上ノ 善繩 六上ノ 義貞 七上ノ 義顯 七上ノ
 義興 八上ノ 義宗 八上ノ 義重 八上ノ 賴章 八上ノ
 義長 九上ノ 義時 十上ノ 賴春 十五上ノ 賴之 十六上ノ
 萬 十上ノ 善男 十上ノ 賴兼 十上ノ 賴遠 十八上ノ
 賴明 十上ノ 賴康 十上ノ 賴直 十八上ノ 好古 廿上ノ
 義助 廿上ノ 義治 廿上ノ 義盛 廿上ノ 義秀 廿上ノ
 義茂 卅上ノ 宜 卅上ノ 良基 卅上ノ 賴盛 卅上ノ
 義光 卅上ノ 義隆 卅上ノ 義弘 卅上ノ 善行 卅上ノ
 能宜 卅上ノ 義定 卅上ノ 義遠 卅上ノ 良繼 卅上ノ

良相 三下ノ 良仁 三下ノ 吉野 四下ノ 良近 四下ノ
 良繩 四下ノ 良房 五下ノ 賴忠 六下ノ 義懷 六下ノ
 賴通 七下ノ 賴宗 七下ノ 能信 七下ノ 賴長 十下ノ
 良經 十下ノ 義昌 廿下ノ 義綱 廿下ノ 良基 廿下ノ
 賴經 廿下ノ 賴嗣 廿下ノ 義忠 廿下ノ 義詮 卅下ノ
 義滿 卅下ノ 義康 卅下ノ 義清 卅下ノ 義兼 卅下ノ
 義氏 卅下ノ 賴時 卅下ノ 義氏 卅下ノ 義清 卅下ノ
 義清 卅下ノ 賴業 卅下ノ 淑人 卅下ノ 賴信 卅下ノ
 賴義 卅下ノ 義綱 卅下ノ 義光 卅下ノ 義家 卅下ノ
 義親 卅下ノ 義國 卅下ノ 義朝 卅下ノ 義平 卅下ノ
 賴政 卅下ノ 賴朝 卅下ノ 賴家 卅下ノ 義經 卅下ノ
 義明 卅下ノ 義澄 卅下ノ 義連 卅下ノ 義實 卅下ノ
 義忠 卅下ノ 義村 卅下ノ 良香 卅下ノ 義仲 卅下ノ
 能景 卅下ノ 義信 卅下ノ 能員 卅下ノ 賴尚 卅下ノ

義國 卅下ノ 義朝 卅下ノ 義平 卅下ノ
 賴政 卅下ノ 賴朝 卅下ノ 賴家 卅下ノ 義經 卅下ノ
 義明 卅下ノ 義澄 卅下ノ 義連 卅下ノ 義實 卅下ノ
 義忠 卅下ノ 義村 卅下ノ 良香 卅下ノ 義仲 卅下ノ
 能景 卅下ノ 義信 卅下ノ 能員 卅下ノ 賴尚 卅下ノ

多部

翼	上ノ	高時	上ノ	高家	上ノ	望	上ノ
道風	上ノ	忠景	上ノ	高直	上ノ	平氏	上ノ
高倉	上ノ	田道	上ノ	武内	上ノ	田道	上ノ
下	上ノ	間守	上ノ	病祿	上ノ	忠盛	上ノ
足麻	上ノ	高棟	上ノ	多	上ノ	忠盛	上ノ
忠度	上ノ	高直	上ノ	田道	上ノ	忠盛	上ノ
高名	上ノ	高重	上ノ	高家	上ノ	津	上ノ
保	上ノ	保母	上ノ	旅人	上ノ	高房	上ノ
種繼	上ノ	忠平	上ノ	為光	上ノ	忠文	上ノ
隆家	上ノ	忠實	上ノ	忠通	上ノ	為隆	上ノ
忠清	上ノ	忠信	上ノ	隆資	上ノ	隆俊	上ノ
為冬	上ノ	為明	上ノ	為時	上ノ	為家	上ノ
為氏	上ノ	為相	上ノ	泰尋	上ノ	忠光	上ノ
高光	上ノ	為業	上ノ	高德	上ノ	忠綱	上ノ

曾部

祖父	上ノ	某	上ノ	養提	上ノ	襲津	上ノ
麻呂	上ノ	某	上ノ	賣	上ノ	彦	上ノ
宗信	上ノ	某	上ノ	某	上ノ	園人	上ノ
某	上ノ	則祐	上ノ	某	上ノ		上ノ
綱手	上ノ	經時	上ノ	水免	上ノ	常胤	上ノ
	上ノ		上ノ	宿祿	上ノ		上ノ

都部

恒柯 廿上ノ 圓 廿上ノ 經氏 廿上ノ 經盛 廿上ノ

經正 卅上ノ 繼麻 卅上ノ 繼人 卅上ノ 常嗣 卅上ノ

繼繩 卅上ノ 經宗 卅上ノ 經房 卅上ノ 經政 卅上ノ

經顯 卅上ノ 嗣信 卅上ノ 經高 卅上ノ 常澄 卅上ノ

角病 卅上ノ 貫之 卅上ノ 經基 卅上ノ 經信 卅上ノ

經成 卅上ノ 經俊 卅上ノ 目 卅上ノ

祢部

根麻 卅上ノ

奈部

仲時 卅上ノ 成益 卅上ノ 長清 卅上ノ 仲世 卅上ノ

永負 卅上ノ 奈良 卅上ノ 成輔 卅上ノ 直幹 卅上ノ

永愷 卅上ノ 名代 卅上ノ 張屋 卅上ノ 長年 卅上ノ

長重 卅上ノ 直實 卅上ノ 長岡 卅上ノ 永手 卅上ノ

仲成 卅上ノ 長良 卅上ノ 長岡 卅上ノ 仲平 卅上ノ

濟時 卅上ノ 成範 卅上ノ 成通 卅上ノ 成親 卅上ノ

成經 卅上ノ 長方 卅上ノ 長親 卅上ノ 長賢 卅上ノ

長能 卅上ノ 並藤 卅上ノ 仲麻 卅上ノ 仲麻 卅上ノ

業平 卅上ノ 永直 卅上ノ 夏井 卅上ノ 夏野 卅上ノ

齊名 卅上ノ 永河 卅上ノ 仲賴 卅上ノ 成信 卅上ノ

長茂 卅上ノ 直常 卅上ノ 名足 卅上ノ

良部

賴光 卅上ノ

武部

百足 卅上ノ 宗遠 卅上ノ 宗盛 卅上ノ 宗清 卅上ノ

宗政 卅上ノ 宗尊 卅上ノ 宗式 卅上ノ 宗連 卅上ノ

宗繁 卅上ノ 宗廣 卅上ノ 宗長 卅上ノ 宗行 卅上ノ

宇部

馬養 ウケミ 上ノ 氏成 ウケノ 上ノ 美村 ウケノ 上ノ 氏鎮 ウケノ 上ノ

馬子 ウケコ 上ノ 嘔美 ウケミ 上ノ 馬來 ウケキ 上ノ 氏綱 ウケノ 上ノ

氏明 ウケミ 上ノ 氏經 ウケノ 上ノ 氏泰 ウケノ 上ノ 氏治 ウケノ 上ノ

氏宗 ウケノ 下ノ 魚名 ウケノ 下ノ 氏範 ウケノ 下ノ 氏滿 ウケノ 下ノ

氏賴 ウケノ 下ノ 氏政 ウケノ 下ノ 宇合 ウケノ 下ノ

為部

惟岳 ウケノ 下ノ

乃部

範圍 ウケノ 上ノ 範氏 ウケノ 上ノ 範滿 ウケノ 上ノ 信連 ウケノ 上ノ

範長 ウケノ 上ノ 教盛 ウケノ 上ノ 教經 ウケノ 上ノ 信義 ウケノ 上ノ

信光 ウケノ 上ノ 信綱 ウケノ 上ノ 憲顯 ウケノ 上ノ 野見 ウケノ 上ノ

以言 ウケノ 上ノ 範賴 ウケノ 下ノ 教通 ウケノ 下ノ 範茂 ウケノ 下ノ

信能 ウケノ 下ノ 信賢 ウケノ 下ノ 宣房 ウケノ 下ノ 範永 ウケノ 下ノ

信賴 ウケノ 下ノ 野足 ウケノ 下ノ 信胤 ウケノ 下ノ 則村 ウケノ 下ノ

範資 ウケノ 下ノ 則任 ウケノ 下ノ 信綱 ウケノ 下ノ 信實 ウケノ 下ノ

信詮 ウケノ 下ノ 範賴 ウケノ 下ノ

於部

弘麻 ウケノ 上ノ 音那 ウケノ 上ノ 大川 ウケノ 上ノ 大丘 ウケノ 上ノ

大火 ウケノ 上ノ 大垣 ウケノ 上ノ 老人 ウケノ 上ノ 根子 ウケノ 上ノ

大磐 ウケノ 上ノ 大麻 ウケノ 上ノ 音人 ウケノ 上ノ 音首 ウケノ 上ノ

大浦 ウケノ 上ノ 大市 ウケノ 下ノ 大津 ウケノ 下ノ 大口 ウケノ 下ノ

老 ウケノ 下ノ 大分 ウケノ 下ノ 大伴 ウケノ 下ノ 音那 ウケノ 下ノ

首名 ウケノ 下ノ 大隅 ウケノ 下ノ

久部

鯨 ウケノ 上ノ 國清 ウケノ 上ノ 邦光 ウケノ 下ノ 玄理 ウケノ 上ノ

國長 ウケノ 上ノ 國夏 ウケノ 上ノ 國雄 ウケノ 上ノ 栗隈 ウケノ 上ノ

公曉 ウケノ 上ノ 黑麻 ウケノ 上ノ 藏 ウケノ 下ノ 藥 ウケノ 下ノ

藥 ウケノ 下ノ

也部

八國^{上ノ} 泰時^{上ノ} 泰家^{上ノ} 安人^{上ノ}
 保胤^{上ノ} 康盛^{上ノ} 泰藤^{上ノ} 安府^{上ノ}
 家持^{上ノ} 安麻^{上ノ} 倭麻^{上ノ} 山村^{上ノ}
 夜双^{上ノ} 山蔭^{下ノ} 保則^{下ノ} 保忠^{下ノ}
 泰衡^{下ノ} 康長^{下ノ} 安仁^{下ノ} 泰盛^{下ノ}
 泰親^{下ノ} 安雄^{下ノ} 泰村^{下ノ} 康信^{下ノ}

麻部

麻呂^{上ノ} 眞敷^{上ノ} 麻呂^{上ノ} 政村^{上ノ}
 眞鳥^{上ノ} 昌能^{上ノ} 政家^{上ノ} 眞綱^{上ノ}
 正隆^{上ノ} 正朝^{上ノ} 正忠^{上ノ} 正武^{上ノ}
 眞負^{上ノ} 正通^{上ノ} 雅忠^{上ノ} 眞成^{上ノ}
 正棟^{上ノ} 益立^{上ノ} 匡房^{上ノ} 匡衡^{上ノ}
 正成^{上ノ} 正行^{上ノ} 正儀^{上ノ} 正成^{上ノ}

計部

眞身^{上ノ} 眞玉^{上ノ} 眞楯^{上ノ} 眞根^{上ノ}
 眞賣^{上ノ} 眞呂^{上ノ} 眞楯^{上ノ} 眞衛^{上ノ}
 松影^{下ノ} 雅經^{下ノ} 雅忠^{下ノ} 雅實^{下ノ}
 摩理^{下ノ} 眞備^{下ノ} 滿仲^{下ノ} 雅實^{下ノ}
 雅定^{下ノ} 政子^{下ノ} 眞道^{下ノ} 摩漏^{上ノ}
 毛野^{上ノ} 堅秀^{上ノ} 元度^{上ノ} 兼好^{上ノ}
 敬福^{上ノ} 慶雲^{上ノ} 毛野^{下ノ} 玄惠^{下ノ}
 袈裟^{下ノ}

布部

古麻^{上ノ} 福信^{上ノ} 古麻^{上ノ} 吹負^{上ノ}
 古麻^{上ノ} 淵魚^{上ノ} 書主^{上ノ} 古嗣^{上ノ}
 録^{上ノ} 不比^{下ノ} 房前^{下ノ} 富土^{下ノ}
 船王^{下ノ} 冬嗣^{下ノ} 冬緒^{下ノ} 藤房^{下ノ}

文觀 廿下ノ 福依 廿下ノ 文雄 廿下ノ 藤綱 廿八ウ
古麻 下ノ 古麻 下ノ 古麻 下ノ 古人 下ノ
呂 下ノ 呂 下ノ 呂 下ノ 呂 下ノ
文時 下ノ

古部

是雄 四上ノ 小町 廿上ノ 木間 廿上ノ 維頼 廿上ノ
惟範 卅上ノ 維茂 卅上ノ 維盛 卅上ノ 許智 卅上ノ
惟直 卅上ノ 惟信 卅上ノ 惟時 卅上ノ 小東 卅上ノ
惟成 卅上ノ 伊通 卅上ノ 惟方 卅上ノ 巨勢 卅上ノ
巨勢 卅上ノ 惟康 卅上ノ 小宰 卅上ノ 小式 卅上ノ
麻呂 卅上ノ 親王 卅上ノ 相 卅上ノ 部 卅上ノ
茲俊 卅上ノ 宿禰 卅上ノ 古佐 卅上ノ 子首 卅上ノ
惟義 卅上ノ 是善 卅上ノ

延部

吉祥 卅上ノ

安部

朝元 四上ノ 顯氏 卅上ノ 安達 卅上ノ 東人 卅上ノ
敦盛 卅上ノ 赤兄 卅上ノ 東人 卅上ノ 章兼 卅上ノ
章信 卅上ノ 安良 卅上ノ 東人 卅上ノ
明麻 卅上ノ 赤人 卅上ノ 秋津 卅上ノ 愛發 卅上ノ
顯忠 卅上ノ 在衡 卅上ノ 顯隆 卅上ノ 敦光 卅上ノ
明衡 卅上ノ 敦基 卅上ノ 顯季 卅上ノ 敦頼 卅上ノ
天 卅上ノ 阿知 卅上ノ 荒田 卅上ノ 縣守 卅上ノ
槍 卅上ノ 赤主 卅上ノ 阿閉 卅上ノ 有雄 卅上ノ
顯友 卅上ノ 赤漆 卅上ノ 阿閉 卅上ノ 有雄 卅上ノ
顯房 卅上ノ 有雅 卅上ノ 顯信 卅上ノ 顯能 卅上ノ
顯統 卅上ノ 顯時 卅上ノ 顯家 卅上ノ 顯基 卅上ノ
鹿鹿 卅上ノ 淳茂 卅上ノ 縣守 卅上ノ

佐部

貞世 卅上ノ 酒公 卅上ノ 貞藤 卅上ノ 貞滿 卅上ノ
貞時 卅上ノ 實平 卅上ノ 貞胤 卅上ノ 貞宗 卅上ノ

負時 サトキ 上ノ サトキ 負盛 サトキ 上ノ サトキ 負能 サトキ 上ノ サトキ 負直 サトキ 上ノ サトキ
 尺麻 サトキ 上ノ サトキ 救手 サトキ 上ノ サトキ 負經 サトキ 下ノ サトキ 負宗 サトキ 上ノ サトキ
 負載 サトキ 上ノ サトキ 定基 サトキ 上ノ サトキ 實賴 サトキ 下ノ サトキ 佐理 サトキ 六ノ サトキ
 實資 サトキ 下ノ サトキ 定賴 サトキ 八ノ サトキ 實行 サトキ 下ノ サトキ 實能 サトキ 下ノ サトキ
 實定 サトキ 下ノ サトキ 實氏 サトキ 下ノ サトキ 實世 サトキ 下ノ サトキ 定房 サトキ 下ノ サトキ
 實方 サトキ 下ノ サトキ 定家 サトキ 下ノ サトキ 實基 サトキ 下ノ サトキ 負行 サトキ 下ノ サトキ
 負範 サトキ 下ノ サトキ 負任 サトキ 下ノ サトキ 酒君 サトキ 下ノ サトキ 實盛 サトキ 下ノ サトキ
 定綱 サトキ 下ノ サトキ 定範 サトキ 下ノ サトキ 定平 サトキ 下ノ サトキ 定清 サトキ 下ノ サトキ
 實朝 サトキ 下ノ サトキ 負主 サトキ 下ノ サトキ 負政 サトキ 下ノ サトキ

幾部

義純 キヨツク 上ノ キヨツク 清氏 キヨツク 上ノ キヨツク 清磨 キヨツク 上ノ キヨツク 清盛 キヨツク 上ノ キヨツク 公綱 キヨツク 上ノ キヨツク 公麻 キヨツク 上ノ キヨツク 清直 キヨツク 下ノ キヨツク 清河 キヨツク 下ノ キヨツク 淨三 キヨツク 下ノ キヨツク
 公季 キヨツク 下ノ キヨツク 公任 キヨツク 下ノ キヨツク 清衡 キヨツク 下ノ キヨツク 公教 キヨツク 下ノ キヨツク

公經 キヨツク 下ノ キヨツク 公相 キヨツク 下ノ キヨツク 公宗 キヨツク 下ノ キヨツク 清忠 キヨツク 下ノ キヨツク
 公賢 キヨツク 下ノ キヨツク 清輔 キヨツク 下ノ キヨツク 淨野 キヨツク 下ノ キヨツク 清人 キヨツク 下ノ キヨツク
 清行 キヨツク 下ノ キヨツク 樵夫 キヨツク 下ノ キヨツク 清公 キヨツク 下ノ キヨツク

由部

行光 キヨツク 上ノ キヨツク 行成 キヨツク 下ノ キヨツク 行房 キヨツク 下ノ キヨツク 行實 キヨツク 下ノ キヨツク
 行政 キヨツク 下ノ キヨツク 行義 キヨツク 下ノ キヨツク 行平 キヨツク 下ノ キヨツク 行家 キヨツク 下ノ キヨツク
 行平 キヨツク 下ノ キヨツク 行親 キヨツク 下ノ キヨツク 行文 キヨツク 下ノ キヨツク

美部

通治 キヨツク 上ノ キヨツク 通言 キヨツク 上ノ キヨツク 岑守 キヨツク 上ノ キヨツク 通信 キヨツク 上ノ キヨツク
 水守 キヨツク 上ノ キヨツク 源 キヨツク 上ノ キヨツク 通盛 キヨツク 上ノ キヨツク 三狩 キヨツク 上ノ キヨツク
 御行 キヨツク 上ノ キヨツク 躬恒 キヨツク 上ノ キヨツク 御方 キヨツク 上ノ キヨツク 道明 キヨツク 下ノ キヨツク
 三守 キヨツク 下ノ キヨツク 道隆 キヨツク 下ノ キヨツク 道兼 キヨツク 下ノ キヨツク 道長 キヨツク 下ノ キヨツク
 通憲 キヨツク 下ノ キヨツク 光頼 キヨツク 下ノ キヨツク 道家 キヨツク 下ノ キヨツク 光親 キヨツク 下ノ キヨツク
 道平 キヨツク 下ノ キヨツク 光繼 キヨツク 下ノ キヨツク 光季 キヨツク 下ノ キヨツク 光宗 キヨツク 下ノ キヨツク

本草年代人抄字彙前編

道俊 下ノ 御主 下ノ 滿兼 下ノ 三船 下ノ
下ノ 人 卅三才 卅七ウ 卅四ウ 卅五才
道眞 下ノ 岑嗣 下ノ
下ノ 卅六才 卅七才

志部

絶布 上ノ 重忠 上ノ 滋野 上ノ 茂光 上ノ
一才 五才 廿二才 卅七ウ
鳴 卅上ノ 重衡 卅上ノ 重盛 卅上ノ 重能 卅上ノ
卅ウ 卅五才 卅六才 卅七才
俊哲 卅上ノ 重忠 卅上ノ 辰尔 卅下ノ 重家 卅下ノ
卅五才 卅六才 卅七才 卅八ウ
鹿取 卅下ノ 重範 卅下ノ 重時 卅下ノ 晋卿 卅下ノ
卅三ウ 卅四ウ 卅五ウ 卅六ウ
重光 卅下ノ 嶋足 卅下ノ 順 卅下ノ 嶋子 卅下ノ
卅五才 卅六才 卅七才 卅八ウ
推根 下ノ 俊雅 下ノ 聖尋 下ノ 淨辨 下ノ
卅下ノ 卅八ウ 卅九ウ 卅十ウ
津彦 空ハウ
信紗 下ノ 静 下ノ 白箸 下ノ 鹽焼 下ノ
卅七ウ 卅八ウ 卅九ウ 卅十ウ
志計志下ノ
麻呂 卅七才

惠部

蝦夷 卅上ノ 蝦夷 卅上ノ 惠尺 卅上ノ 圓觀 卅下ノ
卅六ウ 卅七ウ 卅八ウ 卅九ウ

比部

弘吉 上ノ 秀國 上ノ 廣成 上ノ 廣有 上ノ
九才 九ウ 十六ウ 廿二ウ
廣世 上ノ 廣刀 上ノ 廣蟲 上ノ 久綱 上ノ
廿三ウ 廿四ウ 廿五才 廿七才
廣成 上ノ 人麻 上ノ 廣足 上ノ 廣麻 上ノ
廿九ウ 卅才 卅一ウ 卅二才
廣成 上ノ 廣常 上ノ 廣相 上ノ 日香 上ノ
卅三才 卅四才 卅五ウ 卅六才
廣元 上ノ 廣江 上ノ 廣嗣 下ノ 秀郷 下ノ
卅五才 卅六才 卅七才 卅八才
秀康 下ノ 比羅 下ノ 秀義 下ノ 廣綱 下ノ
卅九才 卅十才 卅十一才 卅十二才
廣純 下ノ 彦國 下ノ 久明 下ノ 微妙 下ノ
卅十三才 卅十四才 卅十五才 卅十六才
秀刀 下ノ 廣泉 下ノ
卅十七才 卅十八才

毛部

諸高 上ノ 盛遠 上ノ 師直 上ノ 師泰 上ノ
四才 七才 廿九才 卅九才
師冬 上ノ 諸兄 上ノ 基盛 上ノ 盛俊 上ノ
廿上ノ 卅上ノ 卅四ウ 卅五ウ
盛嗣 上ノ 守延 上ノ 師義 上ノ 百川 下ノ
廿五ウ 卅五ウ 卅六ウ 卅七才
諸葛 下ノ 基經 下ノ 師輔 下ノ 師實 下ノ
四才 五才 六才 九才

目十一

師通モトミツ下ノ九ウ 基房モトノリ下ノ十オ 師長モトナガ下ノ十二オ 師光モトミツ下ノ十六オ

基通モトミチ下ノ十七オ 師賢モトケル下ノ廿オ 師基モトモト下ノ廿二オ 基俊モトトシ下ノ廿四オ

百能モトノリ下ノ廿七オ 基清モトキヨ下ノ卅オ 基氏モトウヂ下ノ卅二オ 盛長モトナガ下ノ卅四オ

盛綱モトツナ下ノ卅四オ 元輔モトノサケ下ノ卅五オ 基綱モトツナ下ノ卅五オ 師房モトノリ下ノ卅五オ

師仲モトナカ下ノ卅七オ 盛遠モトトシ下ノ卅七オ 守屋モリヤ下ノ卅七オ 親王モトノリ下ノ卅七オ

兄雄ケイユウ下ノ卅三オ 宣令ノボリツツ上ノ十今 全成センセイ上ノ十五オ 関雄セキユウ下ノ廿五オ

小角コカク下ノ卅三オ 聖秀セイシュ下ノ卅三オ 晴明ハルミ下ノ卅三オ 聖遠セイエン下ノ卅三オ

千任チニ下ノ卅三オ 清言セイゴン下ノ卅三オ 須部スベ

祐親スケチカ上ノ一ウ 祐清スケキヨ上ノ一ウ 資氏スケウヂ上ノ九ウ 鉦鈞シノヅク上ノ十九ウ

季長スセナガ上ノ卅三オ 祐成スケナリ上ノ卅三オ 駿河ウマノカ上ノ卅三オ 車親クルマチカ上ノ卅三オ

菅根スガネ下ノ五ウ 資平スケヘイ下ノ七ウ 資仲スケナカ下ノ七ウ 秀房ヒコノリ下ノ十九ウ

資朝スケアサ下ノ十九ウ 資名スケナ下ノ廿三オ 資明スケアキラ下ノ廿三オ 佐世サセ下ノ廿五オ

純友スミトモ下ノ廿九ウ 少麻シヨマ下ノ卅三オ 輔正ホトシタカ下ノ卅六オ 季光スセミツ上ノ卅五オ

石川年足 大紫蘇我連子曾孫也父石足年足性廉勤好讀書最習於治

石川名足 年足子延曆中薨年六十一名足強記有口弁剖斷无滯狀性

石川豐成 年足弟寶龜初授正三位任中納言三年薨

伊東祐親 姓藤原工藤大夫家繼孫也雜髮曰叔心父曰祐家祐親稱河

津二郎源賴朝謫居于州祐親及子祐泰與州豪族迎獵于奧野祐繼子祐經

命家僮田祐親祐泰祐泰死之祐親乃遣次子祐清殺祐經家僮初賴朝抵伊

藤與祐親女通生一兒祐親竊殺其兒兼圖害賴朝治承中賴朝舉兵敗于石

橋山走土肥祐親師兵追之後為天野遠景見擒遂自殺

伊東祐清 稱伊東九郎祐親子父祐親將朝淡德之後從平軍與源義仲戰于篠原而死

石川義純 任飛騨守應徵至笠置及城陷父子力戰自殺

祐覺 初居法勝寺學律稱覺應坊當後醍醐帝在船上乃入延曆寺集兵勤

四三

四四

四五

四六

四七

四八

四九

五〇

五一

五二

五三

五四

五五

五六

五七

五八

五九

六〇

六一

六二

六三

六四

王又從新田義貞東征足利尊氏及大軍敗從還駕之幸延曆寺既而攻宇都宮公綱於神樂岡破之車駕再幸延曆寺祐覺乃率五千人擊小笠原貞宗於野路篠原敗還終屢駕入京師足利尊氏斬之

石塔義房 稱四郎尊氏之族弟也父賴茂基俱每從其行戰會義與起兵上野來討尊氏義房與俱攻取鎌倉義詮逼駕于男山義房與吉良滿貞奉詔入援不知所終

將軍家族 附屬

伊勢三郎義盛 伊勢人也稱江三郎嘗殺往野居焉以劫盜為生義經往奧州也道歷上野投義盛家義經診其容貌

可用遂相約為君臣從軍甚有功及義經去京師遂飯伊勢襲守護首藤經俊拒而卻之遂自殺鈴鹿山

將軍家臣

泉親衡 信濃人稱小二郎經基王第五子源滿仲之裔也父曰公衡親衡齊

力過入建保中謀奉將軍賴家子千壽丸為師滅北條氏遣僧安念巡歷諸國

七二 誅將士。應者稍衆。安念詣千葉成胤。成胤縛送北條義時。義時訊鞠之得狀。因遣兵捕親衛奮鬪。士卒多被殺傷。遂逃亡不知所之。

七三 石橋和義。初名氏義。稱尾張三郎。足利高經再從兄也。父吉田義博。和義從尊氏及犯京師。尊氏之走蔡紫也。留和義於備前。與田井飽浦松田內藤諸氏據三石城。筑塞于甲斐河。寒船坂杉坂隘。以扼水陸。義負將兵西征。至播磨。遣弟脇屋義助攻船坂。不能進。會兒鳴高德應。義負舉義熊山。約期日前後。攻船坂。和義相持旬日。從尊氏入京師。及尊氏直義講和。和義以前有德于直義。削髮改名心勝。正平十六年。義誣授以若狹守護。與今富莊為食邑。明年義詮遣和義及今川貞世等發兵往助仁木義尹。不知其所終。

七四 今川範國。稱五郎。尊氏族弟也。祖國氏。領國小字松王丸。嘉曆中。雜髮。法名心省。延元元年。尊氏陣于東寺。範國與官軍戰。阿彌陀峯破之。尋與仁木義長拒官軍於四官河原。三年。與桃井直常等擊源頭家於青野原。尊氏以為駿河守護。與采邑數十。正平中。從高師直破捕正行。又從尊氏擊直義。弘和三年卒。時年九十。

七五 今川範氏。範國子。尊氏討直義。範氏從有氏賴等。陷平石城。

七六 今川貞世。範國子。為左京亮伊豫守。義詮再戰。再勝。遂破之。清氏尋歸順。與正儀等來逼京師。貞世稱兵屯于山崎。退陣于鳥羽。秋。山。義詮竟走近江。明年。又從義詮攻京師。克之。後。薙髮。号了俊。建德二年。菊地武政奉懷良親王起兵。義滿以貞世為九州探題。與兵進至肥後。與武政戰。攻武朝。天授元年。與少貳冬資戰。斬之高麗。遣使請禁侵掠。貞世報之。又策鎮西之便。宣條例。以進義滿答書。許行其事。大內義弘常謀陷害貞世。代為探題。因由義滿左右讒講之。氏滿叛。義滿于鎌倉。尋義弘叛。義滿急召貞世。還京師。又急命歸于鎮西。貞世已知被疑。不復起任所。直歸遠江。久之。義滿命召之。至京師。應永末卒。貞世善和歌。著落書露頭難太平記。又作今川狀。誠子仲秋。

七七 今川範滿。範國弟。為刑部少輔。小手差原之戰。範滿適疾不能騎。乃被杖上馬。傳兩足于逆鞍。出戰而死。

七二 七三 七四 七五 七六 七七 丁丑空位 戊寅空位 巳卯空位

後堀天皇 后妃 五十餘依 年表 庚辰石羊

二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

三五
二六
二七
二八
二九
三〇
三一
三二
三三

今川賴貞 元元年。尊氏再犯男山行宮。賴貞率兵破官軍於竹田。尋擊兵圍金碓。不利。明年又將二萬餘人扼要路。後從師直與挑井直。常戰於京師。

石塔賴房 義房之子也。直義之謀殺高師直。事敗。出奔大和。賴房與越智某勸直義。復京師。尊氏復以軍政委直義。賴房特勢與諸將內不相協。乃從直義奔保。越前。尊氏將兵來討。又去而從直義於鎌倉。直義死。賴房遂詣行在。帝頗重之。後復叛降于義詮卒。

文學
伊與部馬養 其先出自大明命。後少神積命。馬養持統帝時拜撰善言司。後為皇太子學士。至從五位下。卒年四十五。大宝中追賞撰律令功。賜其子功田封戶。宝字中傳功田十町於其子。馬養嘗為丹後與謝郡司。作文記水江浦嶋子事。傳于世。

石上宅嗣 左大臣麻呂孫。中納言乙麻呂子也。性朗悟。有姿儀。好學。經史諸家無不博涉。善屬文。工草隸。光仁帝之立。豫定策。進大納言。正三位。天應元年薨。年五十三。詔贈正二位。自宝字以後。善文者。世推宅嗣。與淡海三船並稱。性愛山水。每遇所適。攬筆成論。其詩賦數十首。傳于世。嘗捨其宅創阿囡寺。寺內建一院。藏儒書。名曰芸亭。自作記。有欲就閱者。則聽之。

列女
家原音那 左大臣多治比島之妻也。有婦德。和銅五年。詔賜邑五十戶。
飯高諸高 伊勢飯高郡人也。性廉謹。志慕貞潔。光仁朝。直內教坊。遂補本郡采女。飯高氏真采女自此始矣。室龜七年。叙從三位。為典侍。八年卒。
和泉式部 越前守大江雅致女也。善和歌。嫁和泉守橘道真。生小式部。道真歿後。仕上東門院。再醮藤原保昌。

方技
伊伎是雄 壹岐鳴石田郡人也。本姓卜部。後賜今姓。自始祖忍足尼舍世。掌龜卜。子孫傳習。至是雄。最精其術。為當時所推重。貞觀中。任丹波權掾。

波部
朝臣

安寧天皇
后妃
淳名底仲
後皇后
皇太子
息耳耳命
磯城津彥
命
癸丑元年
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九

秦酒公 秦始皇帝后普洞王子也事
雄畧帝賜姓曰禹豆麻佐

秦友足 壬申之亂
亂敗死 土師千嶋 壬申之亂
戰敗被執

秦綱手 天武八年卒
壬申功臣 土師眞敷 天武十一年
壬申功臣

羽田八國 壬申之役
降于天武

羽粟翼 山背乙訓郡人
官還自唐授從五位下
天應元年奉教至難波鍊補
延曆中為丹波介

秦河勝 山城葛野人
推古十一年受佛像
於豐聰耳皇子造峰國寺以置之

皇極三年捕大
生部多答之

春枝王 左京人
三品忍壁親王之后也
父仲嗣王春枝少仕嗟峨帝
為人謙

秦朝元 父僧弁正
大室中從父兄入唐學
問父兄皆死于唐
朝元飯仕朝廷

長谷部信連 右馬允為連子也
為人勇年甫十六直竜口
以功任左兵衛尉
後隸以仁王治承四年
王與源賴政謀欲誅平族
而支泄靜海遣源

兼綱源光長等率兵圍第收王
賴政得知變急告王遁難於園城寺
信連取掃人衣裳及笠使王服之
為婢妾乘夜出宮
黎明兼綱等圍王第
信連縱橫奔擊無敢當者
為虜毫無愧色
靜海雅聞其名欲後為己用
赦死流伯耆平族滅後至鎌倉
賴朝賜能登大屋莊
建保六年終

烟時能 稱六郎左衛門
武藏人也體自雄傑志氣壯烈
長於謀畧多力善泗擊刺
騎射无不精妙每戰未嘗敗
年甫十六好角力坂東莫敵者
后家信濃以獵為生
從義貞及義助力戰於船坂
略加賀越前襲足羽城
及官軍失守只時能率二十七人
守鷹巢城一井氏攻亦來會
足利高經及高師治將兵攻之
至高經引却不復來戰
時能簡兵十六人夜發伊地山
馳騁塵戰高經軍敗
踰川而走時能身多被創
流矢中肩矢鏃不能出三日而死

將軍家臣

畠山重忠 幼名氏王丸
其先出自葛原親山二郎
賴朝據石橋山平氏黨大場景親率相武士眾擊破之
重能宗人與景親共攻賴朝
重忠亦率五百余騎屯于金江川
時年十七會佐原義連及義盛

懿德天皇

后妃

天豐津媛

皇后

皇子

武石彥奇

友房命

辛卯元年

年表

二

三

四

五

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

十八

十九

二十

二十一

二十二

二十三

二十四

二十五

二十六

二十七

二十八

二十九

三十

三十一

三十二

三十三

三十四

三十五

三十六

二人並騎大呼過陣前與三浦眾戰于
 小坪間一日攻三浦族於衣笠城拔之
 既而賴朝軍振引兵出於武藏重忠乃
 師眾往降之元曆元年重忠將五百余
 騎從義經討義仲赴宇治義仲遣將士
 撤橋板拒守之東軍不得濟重忠為諸
 軍魁乃誠厲士卒乱流而濟義仲兵射
 中重忠馬重忠潛行水底扶持溺者投
 之岸上既而諸軍繼濟大戰敗之進入
 京師獲二河瀬致等首三十六級與義
 經謁法皇亦卒兵蹶敵迫義仲妾韞繪
 還護法皇官遂從義經踰鴨越攻平氏
 於一谷文治三年伊勢神人許重忠目
 代姦宄賴朝怒奪重忠所領重忠絕食
 七日杜口不言賴朝命復其本領梶原
 景時來間諂重忠及召見遂執五年
 賴朝親將擊藤原泰衡重忠為前鋒戰
 功居多北條時政誘殺比企能員子姪
 女婿據世子一乃第拒守重忠與義盛
 等諸將從義時攻之眾不能支火宅而
 死重忠長子重保侯平賀朝雅重忠朝
 雅俱時政女婿而重忠妻其前妻子也
 重保與朝雅飲而相忿朝雅惡重保父
 子於妻母牧氏時政以實朝命害重保
 重忠屯兵鶴峯中愛甲李隆矢而死時
 年四十二重忠天資敦厚冲退自守然
 有威嚴等輩值重忠在傍雖夏月避暑
 恐見隨容為之肅然其見敬憚如此又

二二
 二一
 二〇
 一九
 一八
 一七
 一六
 一五
 一四
 一三
 一二
 一一
 一〇
 九
 八
 七
 六
 五
 四
 三
 二
 一
 七五空位

孝昭天皇
 后妃

世襲足媛
 皇后

皇太子

天皇孫國

押人帝

年表

丙寅元年

二十
 十九
 十八
 十七
 十六
 十五
 十四
 十三
 十二
 十一
 十
 九
 八
 七
 六
 五
 四
 三
 二

有異力
 聰弁

畠山國清 上總今足利義兼子義純六世
 孫也義純來冒稱畠山氏國清

為修理大夫建武二年從直義拒義貞

明年從尊氏戰京師遂從奔筑紫與直

義擊被菊地武敏又從尊氏攻延曆寺

有功四年代高師泰守河内石川若既

而屬直義奔越前拒尊氏不利與細川

頭氏勸直義再講和國清頭氏耻其議

不成乃去從尊氏攻直義誘致于鎌倉

遂斃殺之八年為基氏執事後薙髮号

道誓十三年國清以計誘殺義興尊氏

殺義詮新立義詮基氏竟不相好也國

清因圖之命發關東八州兵明年從義

詮南侵陷數城而國清本謀不在與官

軍致戰及官軍復起潛逃還鎌倉入三

津金山城走保修禪寺出降基氏馳至

京師又去居宇治憑楠正儀請飯順朝

議不許遂竄南都山城之間而病死

畠山義溪 稱三郎為伊豆守護國清弟從

奔伊豆明年基氏偽招降俄而國清出

凶義溪就結城直光請救死後因得脫

去居京師義詮免其罪授越前守護與

諸將攻高經越前遂平義溪在任頗有

治績天授五年

卒年四十九

七十七
七八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三

旨。義昌乃以計請而得之。其文一傲。論旨。義貞大悅。明日遂稱病還。世良田爰高時兵敗于京師。於是增發大兵。調糧郡縣。以世良田素多豪富。特課以錢六千萬。限五日。遣吏馳迫里民。斂卒太急。義貞執而梟之。高時大怒。將移兵來討。義貞乃與弟義助卒百五十人。舉義生品祠前。建中黑旗。拜讀令旨。出放笠懸野。抵日暮。諸源雲集。聲勢大振。卒進討鎌倉。乃馳使者奏捷。行在既而高時伏誅。舉族盡亡。帝大喜。遂授義貞左馬助。建武元年入朝。叙從四位上。任左兵衛督。兼播磨守。管上野。播磨二國守。護。宿衛京師。帝方寵任。尊氏與尊氏同宗。嘗因微嫌。不相諒。及尊氏反。賜節刀。將數萬兵征之。官軍不利。尊氏入犯京師。帝幸延曆寺。義貞敗尊氏于京師。尊氏遂浮海西走。以功任左近衛中將。居一月。山陰山陽諸國復起。應于尊氏。詔義貞管領山陰山陽十六國事。往討之。皇師敗績于兵庫。楠正成死之。帝復幸延曆寺。義貞奉皇太子奔越。延元三年。藤鳴戰有飛矢。中額。不能起。終自刎而死。年三十八。

新田義頭

稱小五郎。義貞之子也。每從在征戰間。以父功為越後守護。大渡之敗。以三千餘人斷後。敵兵六方追之。義頭力戰數合。躬中數瘡。遂從幸延

孝安天皇

后妃

押媛皇后

皇子

大君備諸

進帝

年表

已丑元年

二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十

新田義興

幼名德壽丸。義頭異母弟也。以母賤。不為義貞所愛。幼居上野。延元二年秋起兵。應源頭家。遂合兵攻拔鎌倉。明年春戰青野原。破上杉憲頭。及頭家薨。從其弟頭信。據男山。王師敗績。奔詣吉野。帝延見。嘉其才器。加冠御前。賜名義興。授左兵衛佐。助義良親王。泛海遇風。義興船漂到武藏石濱。仍匿東國。正平七年春。與弟義宗。義治起兵。攻鎌倉。尊氏親率兵逆戰于小手。差原。尊氏敗走。基氏出走。仍居鎌倉。半月後。保越後。義興遂獨轉客武藏。上野間。為竹沢良衡。江戶克實所謀。死於矢口渡中流。後矢口渡數有光。惟土人建祠。至今祀之。号新田大明神。

新田義宗

兄義頭卒。立為嗣。時六歲。任武藏守。左兵衛佐。聽昇殿。後拜左近衛少將。與兄義興從弟脇屋義治。久匿東國。以伺時隙。正平七年進至武藏。尊氏躬逆。小手差原。接戰。勝敗相當。退保笛吹嶺。引兵奔越後。二十三年七月。與義治起兵。與上杉憲頭等戰。不克。死之。

將軍家族

新田義重

源義家孫。義國長子也。叙從五位下。為大炊。今居上野新田郡。

号新田冠者。雜髮名。上西。義重以義家孫亦懷自立心。賴朝遣書招之。不報。聚兵據寺尾城。及飯鎌倉。賴朝請義重文。義重辭之。遂所疎斥。建仁二年卒。年六十六。

將軍家臣

二階堂貞藤

出羽守行藤子也。以才學稱于時。及高時圖行廢逆。諫之。

不用命。攻護良親王於吉野。城陷。村上義光陽為護良死之。貞藤得其首。既而進襲高野山。移兵會大佛高直。攻千劍破城。後與高直等出降。帝命食其舊邑。無幾謀叛。伏誅。

仁木賴章

稱二郎三郎。其先出足利義清。元弘初。尊氏起兵。賴章與弟義

長每從。在行間。尊氏西道。留子義詮於石龜寺。使賴章義長佐之。及尊氏東擊直義。賴章兄弟從。攻直義。又從與新田義宗戰。小手差原。還為執支。据佐野城。尊氏與直冬等戰。京師。賴章陣嵐山。延望。後從義詮。犯吉野。正平十五年。薙髮号道環。明年卒。年六十一。

仁木義長

稱二郎四郎。賴章弟。自尊氏起

越後。參河。伊勢。伊賀。守護。食邑凡數百處。而為人兇殘。賞罰任意。專恣益甚。以敵諸將不平之。義詮犯吉野。畠山國清率軍西上。義詮使義長以兵出陣西宮。國清素嫉義長。義長亦欲自擅功績。已而國清破官軍。還京師。會官軍攻譽田城。與諸將赴天王寺。議返攻。義長義長乃遣姪賴夏弟賴勝。勒兵自備。即夜義詮逃脫。敵軍稍近。義長不知所為。間道奔伊勢。又逃亡據長野城。遂遣使吉野。飯順。後又請降。義詮宥罪。還京師。尋削髮。天授二年卒。

孝子

丹生弘吉

若狹遠敷郡人。幼喪父。獨與母

居。力田奉養。其所種雖遭水旱。風蝗。未嘗被害。鄉里以為孝感之所。致事。聞負觀中。叙位二階。

保部

朝臣

穗積百足

任申之乱。為大伴吹負。被誘殺。

星川麻呂

天武八年卒。任申功臣。

五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七

二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三十 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四十 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九

七六 本性 南都般若寺僧。後醍醐帝幸笠置。敵

七九 兵犯行宮。本性房以事至于行在山

八〇 多軍石。本性有異力。便抱之。乘高連投

八一 數千枚。敵人馬中之。歷死無算。山下流

八二 水為之。變色。敵兵

八三 號魄。數日不敢近。

八四 堀口負滿 上野人。新田義貞之族也。父貞

八五 義貞。建義貞。滿為上將。從攻

八六 北條高時。向巨福呂坂。斬赤橋盛時。鎌

八七 倉由是而敗。義貞與高師泰。拒失矧河。

八八 負滿挺身奮戰。敗之。延元元年。帝直御

八九 延曆寺。尊氏偽送款。且請還闕。帝密許

九〇 之。車駕將發。負滿馳詣行在。小揖立進。

九一 攀轅泣奏曰。云。辭氣憤慨。聲淚俱下。帝

九二 有慚色。遂付皇太子于義貞。北赴越前。

九三 負滿從之。源顯家西上。負滿時在美濃。

九四 率兵來從。後

九五 不知其所終。

九六 細屋秀國 亦新田氏族也。從義貞赴越前

九七 漸逼之。高經軍敗走。据黑丸城。秀國與

九八 藤原行實。船田經政。追攻不能拔。義貞

九九 戰死軍潰後。

百〇 不知其所終。

百一 本間資氏 稱孫四郎。相摸人也。其先出自

百二 射絕倫。鹽治高負貢千里馬。帝命資氏

百三 調之。大恊旨。義貞拒尊氏于和田崎。海

孝聖天皇

后妃

細媛皇太后

妃倭國香

媛

妃祖某弟

春日千々

速真若媛

皇子

彦五十狹

并彦命

推武彦命

日子刺

別命

彦狹皇命

皇女

倭迹迹日

百襲姬

倭迹迹推

屋姬

倭迹迹姬

命

辛未元年

二

三

四

五

北條時行

高時子也。小字龜壽。幼匿諏訪

原公宗謀反。潛命時行起兵相應。既而

克發。公宗伏誅。時行乃與賴重等聚黨

五万余人。進向鎌倉。連闕皆突。遂入鎌

倉。兵勢大振。朝廷遣尊氏來討。時行遣

去。清氏走讚岐。保白峯城。義詮遣

細川賴之來攻。清氏戰死城陷。

北條時行

高時子也。小字龜壽。幼匿諏訪

原公宗謀反。潛命時行起兵相應。既而

克發。公宗伏誅。時行乃與賴重等聚黨

五万余人。進向鎌倉。連闕皆突。遂入鎌

倉。兵勢大振。朝廷遣尊氏來討。時行遣

去。清氏走讚岐。保白峯城。義詮遣

細川賴之來攻。清氏戰死城陷。

北條時行

三二 三一 三〇 二九 二八 二七 二六 二五 二四 二三 二二 二一 二十 十九 十八 十七 十六 十五 十四 十三 十二 十一 十 九 八 七 六

名越時基等共三五。邀而拒之。敗走還。賴重等乃使時行先逃。與殘兵自殺。時行自兵起。僅二旬而敗矣。當時謂之二。討尊氏兄弟。朝議能之。會源頭家西上。時行以兵發伊豆。從擊義詮于鎌倉。走之。追亡至美濃。大戰有功。阿部野戰敗。而赴行在。延元三年。從宗良親王。航海先登抵遠江。與今川範氏兵戰破之。

將軍家臣

北條時政 姓平氏。伊豆北條人。其先出自鎮守府將軍貞盛。父曰時家。時政為人外厚重而內文深。能以權畧收眾心。源賴朝流于伊豆。時政與伊東祐親監視焉。歲月既久。賴朝通其女政子。遂為夫妻。及靜海欲殲源氏種類。以絕後患。賴朝起兵以時政為將。先擊目代。平兼隆。尋從賴朝與大庭景親戰于石橋山。兵敗。賴朝走土肥之杉山。景親追躡。及之。時政父子還戰。御命使甲斐得武田信義等精兵二万。會于黃瀬河。霸業既成。以婦翁被親重。文治元年。以搜捕義經。打衛京師。賴朝用大江廣元計。使時政奏請諸國置總追捕使。朝議難之。時政往復論。并遂得之。領七州地頭職。无何。辭之。賴朝薨。賴家襲職。時政

三三 三二 三一 三〇 二九 二八 二七 二六 二五 二四 二三 二二 二一 二十 十九 十八 十七 十六 十五 十四 十三 十二 十一 十 九 八 七 六 五 四 三 二 一

叙從五位下。為遠江守。兼政所別當。總軍。遂殺比企能員。悉夷其族。并殺一。幡。幽賴家于伊豆修禪寺。奉十幡。居已家。立為嗣。是為實朝。於是威權傾天下。以牧氏之言。教畠山重忠父子。又欲殺實朝。立女督平賀朝雅。政子使三浦義村。結城朝光。與牧氏并幽于伊豆。建保三年。患瘍卒。年七十八。法名時盛。号願成就院。

北條義時

遠江守時政第二子也。稱江馬小四郎。沈澁有膽畧。度量過人。源賴朝之起兵。與父兄從軍。戰於石橋山。及平宗盛奔西海。隸源範賴擊原田種直於豐後。霸府建以政子弟。日被親信。賴朝薨。政子廢賴家。立實朝。幽賴家于修禪寺。義時矯命陰弒之。項之為相。模守代父執權。叙正五位下。建保元年。和。田義盛舉兵反。分道來進。命子泰時與諸將擊之。義盛死。因為侍所別當。五年。為右京權大夫。代廣元兼陸奥守。承久元年。公晚弒實朝。實朝无子。攝政道家。賴朝元姻親。義時乃迎其子立之。是為賴經。三年。四月。後鳥羽上皇使順德帝讓位于九條帝。脇心以圖滅義時。下院宣。五畿七道。罪狀義時。討之。義時命泰時將十九万余騎。直犯京師。七月。義時遷三上皇於佐隱土三州。廢皇太子。

六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六

懷成。立皇孫茂仁為皇太子。元仁元年卒年六十四。法名觀海。号東勝院。義時外示謙遜。内實陽拔。每遇除拜。不以新官自稱。常嗜蹴鞠。數入仙洞。蹴鞠。上皇頗稱得其法。

北條朝時 義時子。稱相模二郎。膂力過人。建曆二年。以譴屏居駿河。歲余。

和名義盛。稱兵。朝時被殺。在鎌倉。與朝夷名義秀。接戰。被創。眾稱其膽勇。后為式部丞。承久三年。將兵四万余騎。出北陸道。犯京師。擊官崎。定範等破之。歷周防。越后。遠江。守。叙從四位下。為評定眾。晚年雜髮。法名生西。善和歌。寬元二年卒。

北條泰時 右京權大夫。義時長子也。幼名金剛。稱江島太郎。承久三年。後

鳥羽上皇。下院宣于五畿七道。討義時。政子命泰時。及時房。朝時。犯京師。泰時時。房出東海道。京師遂陷。上皇宣諭。泰時。歸罪。廷臣。泰時與時房。入居六波羅。綜理時務。遂承義時意。廢九條帝。立後堀河帝。徙上皇于隱岐。土御門上皇于土佐。順德上皇于佐渡。泰時居之。四歲。京畿肅清。奸宄屏息。元仁元年。會義時卒。歸鎌倉。仁治三年。六月。卒。年六十。法名觀阿。号常樂寺。在職十八年。政平訟理。眾庶樂業。而自量涯分。不登榮顯。至宗親將士。不輒求官職。每遇除拜。常壞

孝元天皇

后妃

薨色誰皇

后

妃填安媛

皇子

大彥命

彥太忍信

命

武垣安彦

命

少彥男心

命

年表

丁亥元年

二

三

四

五

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

把損。銳意輔治。每赴評定。未嘗不先眾而往也。每以清廉自處。无声色娛翫之好。闢交第。繕橋梁。苟利於民。知無不為。不以權寄自標。蓋承久抗王師者。非泰時之意。嘗與三善康連。請究立五十條。著篇為標準。世稱貞永式目。

北條經時 稱弥四郎。時氏之子也。早孤。為相泰時所鞠。為評定眾。以明練著稱。仁治三年。泰時卒。經時襲執權。為武藏守。寬元四年。以疾讓職。弟時賴。尋卒。法名安樂。号蓮華寺。經時善射。

北條時賴 經時同母弟也。小名戒壽。稱五親。為加冠命。名寬元。四年。代經時。襲執權。流光時于伊豆。遂廢賴經。還京師。三浦泰村之弟光村。與護送焉。既還。每謀迎賴經于鎌倉。將作乱。泰村不禁。時賴外祖父安達景盛告之。遂遣弟時定。將大兵擊之。泰村舉族盡自殺。建長三年。前將軍賴經憤為時賴所廢。聚兵京師。黨附頗眾。時賴廢賴嗣。還京師。奉迎後嵯峨上皇。王子宗尊親王為鎌倉主。又養關白藤原兼經女。納為親王妃。康元元年。時賴嬰病。薨。髮法名道崇。号覽了坊。乃退居最明寺。方慮遐荒。辺鄙吏不奉教。以愁毒下民。親自早服。變形。陰為遊僧。周巡諸國。視省風俗。諸民疾苦。弘

不月三十八日堂前編

十五 長三年卒于最明寺年三十七時賴淡
信梵教粗通其旨其在職所施行壹守
貞永式目遵源賴朝政子三代將軍白
制士庶歛然靡服天下稱治矣屢試將
士騎射又好蹴鞠戲
性素勒儉食不貳味

北條時宗 小名聖壽稱相摸太郎時賴子
也甫七歲冠於府第宗尊賜名

二一 時宗幼習射蚤以能著弘長三年宗尊
陰與近幸謀殺時宗事發時宗與政村
等議廢宗尊還京師立世子惟康五年
代長時執權翌年元主遣其臣趙良弼
持書來朝議既草答書詔下鎌倉時宗
不可而止建治元年斬杜世忠等于鎌
倉七年卒年三十四
法名道果号宝光寺

北條時輔 初名時利後更今名弥三郎時
輔庶長子及時宗襲父職圖異

三三 事發時宗命義宗伐之時
輔拒戰死謂之二月騷動

北條貞時 小名幸壽弘安七年代父時宗
執權時年十四明年除相摸守

三六 與平賴綱共誅安達泰盛父子悉夷族
黨賴綱因此威權強盛後數年貞時乃
誅賴綱及安房守流宗綱于佐渡已而
召還襲父職後又以罪謫于上総八年
時輔子與三浦賴盛謀叛貞時捕而誅
之正應二年廢將軍惟康送還京師奉

四三 皇弟久明親王立為將軍正安三年辭
職雖髮法名崇演号最勝圓寺應長元

四四 年卒年四十一貞時慕尚祖時賴治還
辭職之後親衣僧衣遊歷郡國察風觀

四五 俗訪民
病利

北條高時 幼名成壽丸相摸守貞時之子
也正和四年代北條基時任執

五一 權文保元年任相摸守高時為人頑放
舉立無度作事時荒忽如病狂特以宗
嫡襲世職元亨二年陸奧人安藤虎勢
與其族秀長爭事相訴長崎高資兩納
其路久不判二人遂相攻擊高時遣兵
討之無功正中元年謀討北條氏事頗
洩露高時大驚執致藤原資朝俊基于
鎌倉命更鞠問不服高時怒甚將謀廢
立帝遣藤原宣房下賜誓書高時乃改
前議上還其書明年免俊基還京師遷
資朝於佐渡嘉曆元年羅疾危篤長崎
高資勸罷執權雜髮号崇繼高資又以
已意推赤橋守時為執權北條惟貞為
連署眾益不服皇太子薨高時請立本
院皇子量仁親王為皇太子元德二年
高時密命長崎高賴圖長崎高資事洩
乃悉罪高賴流之陸奧元弘元年朝廷
專與護良親王等圖遂前謀高時卒順
高資言屢發大兵赴之及高家見殺尊
氏降官軍府下人心恟々高時謀發六

五二 五三 五四 五五 五六 五七

開化天皇

后妃

伊香色謎

皇后

妃丹波竹

野媛

妃燒津媛

鶴媛

皇孫

命

彦坐王

武豐滿類

別命

皇女

御眞津建

年表

甲申元年

十一 十 九 八 七 六 五 四 三 二

國六。屬泰家西發。乃徵軍糧于郡縣。以

義貞領邑素富。課以錢六萬貫。遣史督

大怒。議罷西師。專攻義貞。兵未及發。義

貞起軍至。拒之于武藏。不利。會六波羅

潰卒至。始知仲時時益敗。死。京師為官

軍所復。上下失膽。知不可支矣。義貞放

火三道來攻。高時逃入東勝寺。時已諸

軍崩潰。死傷降亡略盡。高時終

自殺。長子邦時被捕。誅。年十五。

本間某。稱山城左衛門。大佛定直之家士。

寺坂敗。本間率手兵百餘人。番戰。殺敵

將大館宗氏。貫首于刀。見貞直因謝罪

即割腹斃。

北條時房。始名時連。義時弟也。和田義盛

留莊。遷相摸守。承久三年。義時命其子

泰時及時房將兵犯京。入鎮六波羅南

方。及義時卒。還于鎌倉。與泰時執

權連署。仁治元年卒。世稱大佛殿

北條朝直。時房子。以大佛為氏。建長八年

評定所始置引付頭人。朝直與

焉。遠江守正五位

下。大永元年卒。

北條時直。時房子。初北條高時署為長門

探題之任。未幾原宗西。高津道

惟等來攻。時直東。海東走。會高時已伏

誅。筑紫探題泰時亦為小貳。貞經所亡

時直途窮。投于負經。島津負久

因僧俊雅奏請。貸死復食邑。尋死

北條政村。稱四郎。重時弟也。康元元年與

越後國務轉相摸守。文永中卒。年六十

九。政村為人沈默温雅。善倭歌。縉紳重

之。為東方遺老。及卒。龜

山帝特發使吊其喪

北條時村。初名時遠。政村子。建治二年入

京師。居六波羅北方。數年東歸。

正安三年。與師時。俱執權連署。宗方之

叛。時村欲誅宗方。并除師時等。而專其

三九

三八

三七

三六

三五

三三

三二

三一

三〇

二九

二八

二七

二六

北條泰家。利為左近衛將監。以失職。故削

髮。更号惠惟。元弘三年。高時徵六國兵。

屬泰家。以西上。未發。義貞揚兵來攻。高

時遣二將逆擊。被破。退次分陪。於是命

泰家卒。兵援之。義貞大敗。走。泰家意恃

輒捷。三浦義勝。放屬義貞。俄而義貞

勝薄。官誅諫。泰家錯愕。棄官。而奔。義貞

本朝年代人物掌覽前編

四十一 遂使時興時行名越時兼將兵謀同時
四十二 攻京師既而事覺公宗被誅時興逃去
四十三 不知其所終

北條仲時 執推基時子任越後守元德二
四十四 年與時益俱鎮六波羅仲時判
四十五 北方事時益判南方事元弘元年高時
四十六 貽書仲時時益廢帝殺護良親王付以
四十七 二階堂貞藤及城某兵三千書未啓函
四十八 事洩帝潛出幸于外使大納言師賢詐
四十九 稱乘輿如延曆寺仲時時益不覺明早
五十 將遣負藤及城某遷車駕於六波羅會
五十一 延曆寺僧豪誓來告駐驛于本寺仲時
五十二 時益即遣小田時知卒兵大索禁中帝
五十三 果不在於是執宣房公明實世成輔等
五十四 遷法皇新院及皇太子量仁于六波羅
五十五 遣佐々木時信海東宗政將萬余人攻
五十六 延曆寺既而聞車駕在笠置楠正成櫻
五十七 山茲俊並起舉義旗使播磨谷宗秋隅田
五十八 通綸率諸國兵圍笠置城固未拔而大
五十九 佛負直足利尊氏率東兵適至即遣攻
六十 笠置陶山義高小見山氏真至行殿傷
縱火官軍驚潰帝與師賢藤房具行等
潛出圍押幸赤坂負直等追獲帝及文
武兩臣僧徒一百六十人仲時時益將
兵擁車駕御六波羅南方親王公卿以
下分拘于諸將家明年受高時命立皇
太子量仁稱帝以康仁親王為皇太子

遷帝於隱岐親王已下悉行遷殺居明
羊帝潛航海幸船上山鎮西響應赤松
則村進入京師新主及後伏見花園兩
上皇促駕入六波羅居北方既而高家
戰死尊氏降官軍與則村忠頭等併兵
返攻京師即夜仲時時益扶光嚴院上
皇新院皇太子席卷東走仲時至番馬
嶺割腹而死宗秋以下從士四百人
北條時益 越後守時教子為左近將監元
東走時益先驅道與士卒相失獨播谷
時廣從之民兵四起而射如雨時益遂
中矢而死時廣亦自殺太子以下四散
不知所之有流矢中光嚴院行在陶山
高通吮其血扶上馬行天已曙又遇義
軍數百於途戰破之徒士行亡留者六
百余人

細川和氏 稱八郎其系出自陸奥守源義
焉父曰公賴為阿波守元弘之役尊氏
密圖歸順和氏與上杉重能俱獎成其
計因從攻六波羅尋從尊氏討時行有
功及尊氏及鎌倉和氏與上杉重能為
之謀首焉遂從犯京師尊氏之走筑紫
也留和氏賴春等于讚岐攻略四國數
月尊氏再向京師從戰兵庫又戰京師
並有功焉後復與賴春等從義詮居鎌

崇神天皇 后妃
御間城媛 皇后
如達津半 魚眼妙媛
死尾張大 海媛
皇子
倭彥命
豐城入彥
命
八坂入彥
命
彥五十狹
彥命
五十日鶴
彥命
大入杵命
皇女
國方彥命
豐額入彥
命
澤名城入
彥命
十市瓊入
彥命
坂命
大中彥命

本朝年代人物掌覽前編 十五

本朝年八人物掌覽前編

倭寇令
甲申元年
生表

舍會源頭家來討和氏等出拒與國三
 年卒和氏嘗著蔓相記叙當時事
 細川賴春稱源九郎為刑部大輔任讚岐
守王師東征賴春從負義迎拒
 之戰敗而退尊氏犯關賴春與兄和氏
等往發周防長門兵赴尊氏軍尊氏遂
 逃于筑紫留居讚岐尊氏再犯京師賴
春與諸將累拒王師復與諸將往攻尊
 良親王子金崎城陷之與國初攻破河
 江城進陷世田城守將大館氏明死之
 尋從尊氏攻直義正平七年與和田正
 忠等戰死時年五十四賴春妙善射
 細川顯氏和氏從弟從尊氏陷京師尋從
奔筑紫戰多多良濱又從與義
 貞等戰于京師大有功正平二年將兵
 攻楠正行大敗退保天保寺直義歸順
 也從之與俱攻尊氏既而又從尊氏七
 年與和田正忠等戰大敗還讚岐得三
 千兵直至京師往攻男山陷之
 而還無幾病卒顯氏好禪云
 細川定禪顯氏弟也少而削髮為鎌倉若
宮別當稱鄉律師時行之亂定
 禪與兄顯氏從直義走至武藏後往居
 讚岐及尊氏犯京師起兵應之軍警田
 庄舟木賴重討之次屋嶋定禪夜襲大
 敗之於是四國備前人悉應定禪定禪
 勢益張延元元年以兵東向攻走義助
 追敗義頭長驅入京師受尊氏命急犯

二六

二五

二四

二三

二二

二一

二十

十九

十八

十七

十六

十五

十四

十三

十二

十一

十

九

八

七

六

五

四

三

五四

五三

五二

五一

五十

四九

四八

四七

四六

四五

四四

四三

四二

四一

四十

三九

三八

三七

三六

三五

三四

三三

三二

三一

三十

二九

二八

二七

行在及尊氏棄京師而遁定禪深憤之
 返關大敗走義負追斬其部將數人尊
 氏乃入京師於是定禪勇襲軍中後與
 義負戰兵庫又大破之遂從尊氏戰于
 京師定禪
 功居多焉

細川賴之稱弘九郎賴春子也為人端厚
有謀略好讀書作詩歌為右馬

頭正平中每從尊氏於陣間既而往備
 中鎮撫山陽十七年清氏畔義詮據讚
 岐白峯城以應官軍賴之卒兵攻破城
 遂斬清氏因留讚岐懷輯四國中國人

東歸者亦衆二十二年義詮疾病使子
 義滿監政事賴之為執事任武藏守建
 德二年捕正儀來奔賴之耻言不行辞
 職退居義滿親臨起之授正儀諸軍屢

敗王師神器之復于京師蓋本斯舉云
 尋轉相摸守義滿稍忌賴之權盛天授
 五年命罷賴之職遣還讚岐元中八年

遂召賴之還適備中大亂遣賴之攻平
 之軍還以賴元為執事命賴之參懷決
 事尋山名氏清滿幸背義滿來攻賴之
 拒之大戰走滿幸氏清隨而敗死明年

以疾卒時年六十四義滿親臨其葬家
 臣三嶋外記
 自殺殉焉

文學

本朝年八人物掌覽前編

五十日定

彦希

石衛別命

表邪并王

皇女

勝香足姬

命

西道入苑

命

壬辰元年

年表

二

三

四

五

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

十八

賴春亦與焉。賴春妻六波羅奉行齋藤利行女也。一夕賴春對妻語及身後因悽愴涕下。妻怪詰之。賴春遂以實告。淡戒勿泄。妻以為事。即夙歸告利行。利行大駭。馳告六波羅。北方常葉範負遺山本時綱。小申範行率三千兵分捕。賴兼國長時綱。軍身逼。賴兼寢所。賴兼自知不免。潰腹死。家士盡闕。殺。

土井通治

當後醍醐帝御船上山。通治與

得能通言共舉義。與北條時直戰大敗。之。進倉車駕還官時。赤橋重時據伊豫。通治通言討而平之。及足利尊氏犯京。師。通治通言發戰艦入援。新田義貞奉皇太子往經略北國。通治通言與族通繩從之。

得能通言

稱弥二郎。河野通信族。與土居

從新田義貞。略北國。會天大雪。寒州殊劇。欲戰而士馬皆凍餒。乃與衆拔刀植地伏其上。而跪。通治通言號勇無雙。能執節始終。天下莫不歎借焉。

將軍家臣

土肥實平

平氏其先出自高望。父曰宗平。實平居相模上肥色。稱土肥二

郎。治承四年。源賴朝起義。實平與弟宗遠赴焉。石橋山之敗。大庭景親急追之。

十九

二十

二十一

二十二

二十三

二十四

二十五

二十六

二十七

二十八

二十九

三十

三十一

三十二

三十三

三十四

三十五

三十六

三十七

三十八

三十九

四十

四十一

四十二

四十三

四十四

四十五

四十六

賴朝窘困。逃于指山。只實平從焉。至將士離散者畢集。軍聲大振。不離左右。傾意輔翼。一谷之戰。屬義經。別將兵七千。攻西門。賴朝命實平經畧。備中備后等平氏滅。諸將分部鎮撫。實平膺首選。性多籌略。曉暢軍事。征代之際。賴朝命範賴義經。依其圖畫。

土肥宗遠

實平弟。稱土屋三郎。與兄實平

命使于甲斐。諭武田信義。一條忠賴父子。信義等應命。屢從範賴義經。攻平氏。承元中以私怨殺源家茂。自首幕府。幽于和田。義盛宅。適值賴朝忌月。被赦。

土岐賴遠

稱七郎。美農人也。父曰賴真。其

美濃土岐子孫。因氏焉。賴遠為美濃守護。建武二年。尊氏及於鎌倉。賴遠等為先鋒。與尊氏親王戰。大敗走之。延元元年。從尊氏入京師。又從走筑紫。從直義拒菊池武敏有功。遂從入京師。戰敗走官軍。攻圍義貞。此戰。賴遠功為最。源頭家破。鎌倉西上。賴遠直常。併兵出青野原。與頭家大戰。見敗。明年進與高經等

土岐賴明

賴遠弟。為兵庫頭。雅髮法名周

濟。賴遠之被誅。賴明以不預。夏

本朝年八人... 賢前... 上...

四七 原歸美濃。正平二年。從山名時氏。細川頭氏擊楠正行。五年。起兵美濃。時義詮。義詮親將兵來攻。賴明戰敗。出降。遂被斬。

四五 土岐賴康。賴遠兄。賴清之子也。初賴遠為宗長。統稱所謂拮楨一揆。及被刑。賴康代之。為尾張伊勢守護。正平初。從尊氏擊其弟直義於鏡野。七年。從義詮與諸將共進田原山。陷之。山名時氏攻京師。賴康戰不利。遂從義詮走美濃。十年。與仁木義長從尊氏攻京師。及尊氏死。難髮号善忠。十四年。從義詮犯吉野軍。旋圍仁木義長于長野城。相持三年。遂擊而降之。元中元年卒。年七十。稱建能寺。

六三 土岐賴直。稱惡源太。父曰賴氏。別髮号存。孝。賴直與父俱從尊氏據東寺。以兵出拒官軍于三條河原。會中納言隆資來攻東寺。乘勝焚樓櫓。尊氏死。不能支。賴直適至。尊氏解佩刀與之。賴直往于羅城門側。兩射官軍。手斬數人。官軍為之退走。

六二 文學。嘗奉試對策。養老中。詔每退朝侍東宮。至正六位上。

六四 刀利宣令。嘗奉試對策。養老中。詔每退朝侍東宮。至正六位上。

七五 豐階安人。河內大縣郡人。本姓河保公。彦坐命之後也。至神影。改今姓。安人少穎悟。有局量。以文學早知名。涉獵史漢。最精漢書。及詔春澄善繩講文選。安人為都講。歷大學頭。東宮學士。貞觀三年。拜刑部大輔。是歲卒。年六十五。

八二 孝士。安房安房郡人。性至孝。承和中。救叙三階。終身免戶田租。

八七 列女。甲斐山梨郡人。年十五。嫁鄉人伴富成。女。三枝。平麻呂。夫死。守節不移。承和中。救。免田租。

九一 知部。朝臣。千熊長彦。不知何許人。或曰武藏。應神帝奉命至百濟。布宣命詔。自是歲貢不絕。長彦有力焉。

九四 朝臣。千熊長彦。不知何許人。或曰武藏。應神帝奉命至百濟。布宣命詔。自是歲貢不絕。長彦有力焉。

九九 小子部雷。初名螺贏。神八井耳命之后也。三諸岳大地奉之。因改螺贏名雷。

九九 小子部雷。初名螺贏。神八井耳命之后也。三諸岳大地奉之。因改螺贏名雷。

本朝年人物傳覽前編

景行天皇
后妃
播磨日
太郎天皇
大坂入嫁
皇后
妃水齒郎
媛
妃五十河
媛
妃高田媛
妃日向媛
長木田根
妃兼武媛
妃御刀媛
妃物部五
十琴媛
稻日推郎
姬
迦具瀨媛
皇子
大碓皇子
日本武尊
五百城久
彥皇子
彥人大兄
王

智尊
壬申之亂為先鋒大
戰于瀨田兵敗死之

小子部鉏鈎
為尾張國司守壬申之役率
眾二万來飯及與近江兵戰
自死

忠圓
住淨土寺為僧正素為後醍醐帝所
親用高時遣人捕致四觀文觀忠圓
亦併送之忠圓性怯先自首服自朝廷
密計參謀主名具狀以進高時乃寤之
於越後及亂平還
住本寺不知所終

將軍家臣

千葉常胤
高祖平常將居下總千葉郡父
曰常重常胤世稱千葉介為人
厚重儉謹世為關東望賴朝起兵也安
達盛長傳之檄常胤遲疑不決沉吟久
之子胤正胤賴在側進說屬源家常胤
然之先使胤賴等襲自代胤賴手斬目
代於是常胤師騎三百余謁賴朝賴朝
大喜元曆元年從源範賴討源義仲又
從攻平氏於西海皆有功增食下總三
崎文治三年京師群盜起詔賴朝治之
賴朝使常胤平之五年賴朝擊藤原泰
衡常胤將東海道兵擊之陸奧尋平建
久元年進為從五位下建仁元年卒年
四十初賴朝起兵常胤闔族餽累立大

大授主
忍之別皇
子
稚俊根子
皇子
大酢別皇
子
五十狹城
彥皇子
吉備凡彥
皇子
神櫛皇子
稻背入彥
皇子
武國凝別
皇子
日向兼津
彥皇子
國朝別皇
子
國朝別皇
子
豐戶別皇
子
豐國別皇
子
命
五十功彥

功展力竭忠比諸將最為優賴朝漢倚
信軍政執事莫不參決眷遇不替功
千葉貞胤
下總人胤綱玄孫也襲稱千葉
介元弘元年從大佛負直攻赤
坂城陷之二年護衛車駕至隱岐明年
義負起兵負胤往從之又從討尊氏屢
有戰功及帝幸延曆寺負胤將兵護衛
尋從皇太子赴北國遇雪迷惑矢路衆
欲自殺高經遣使招之負胤降之正平
初從高師直攻補正行于四條嘍直義
之據男山負胤乃歸之已而又從尊氏
討直義追擊上杉憲顯等戰敗六年卒

利部
朝臣 附屬

良忠
僧良室之子也伯父左大臣藤原師
忠養為子叙法印稱殿法印為兵部
卿護良親王候人元弘初從駕笠置與
源具行謀出城班徵兵詔于諸國及行
在敗帝御六波羅良忠謀奪之不果尋
被捕得北條仲時乃付吏閉之室中良
忠多力夜潛破戶逃去三年四月與赤
松則村攻京師不利五月又與諸將攻
克六波羅後護良被幽殺其從
臣三十余人良忠蓋在刑中也

奴部

本朝年人物傳覽前編
二十

才身年八十物學賢前編

眞若玉

列女

豐門入彦

額田部蘇提賣 石見美濃郡人。寡居年久。節義著聞。以積而能散。所

推屋彦命

濟者衆。景雲二年。復其田租終身。

武國皇朝

袁部

眞雅彦命

朝臣

天市根命

弟狷 倭菟田縣人也。與兄狷共為縣之魁師。應神武召。以功封猛田邑。為猛

大曾色別

弟磯城 名黑速。倭磯城邑人。故稱焉。神武東征。應召而至。帝即位。錄弟磯城

命

功。為磯城主。

武押別命

小野妹子 天帶彥國押人命六世孫。米餅國滋賀郡小野村。因為氏。推古朝為遣

不知來入

隨使。隨人呼曰。蘇因高。位至大德冠。

曾能目別

小野毛野 妹。子孫。持統九年。為遣新羅使。赴新羅。至中納言從三位。和銅

命

七年。薨。

色已焦別

小野石根 太宰大貳老子也。寶龜八年入唐。九年正月。至長安。三月。見代

熊津彦命

息前彦人

大兄水城

宗。及飯代宗令。內使趙寶。等俱來。十一月。風濤滄惡。船破沒于海。

兼忍津彦

小野滋野 寶龜八年。以遣唐判官赴唐。九年十月。還。孫興進等共來。

命

小野恒柯 右京人。父滝雄。恒柯少好學。有文才。最工草隸。性矜傲。舉止任

武常別命

情。无所矯飾。書迹之妙。冠絕當時。任播磨守。進從五位上。貞觀初卒。年五十三。

草木命

小野東人 天平十三年。坐藤原廣嗣事。下獄。決杖。流伊豆三島。數年赦還。

稚根子皇

子命

兄彦命

寶字元年。至從五位上。黨奈良麻呂事。覺。逮繫左衛士府。拷掠杖下死。

大我門別

小野岑守 大德冠。妹。子玄孫也。長史事。天長七年卒。岑守與良岑安世等

命

撰。內裏式。先是。行旅。太宰府者。露宿道傍。岑守為大貳。建議。命院。以備止宿。

三川獨祢

小野春風 從五位上。石雄子也。累代將家。春風少遊邊塞。能曉夷語。為鎮守將軍。具宣朝命。於是夷虜大服。奉書乞降。

豐手別命

小野好古 太宰大貳葛絃子也。及藤原純友反。為山陽道追捕使。造戰艦

倭橋別命

二百餘艘。直赴討而平之。安和元年薨。

豐津彦命

小野山田高家 稱太郎。不詳何許人。從義貞署。勳。嚴禁暴掠。義貞敗走。馬中矢。僵。高家馳至。以所乘馬。授于義貞。步聞而死。

五百木根

命

第別命

大軍別命

命

小野山田高家 稱太郎。不詳何許人。從義貞署。勳。嚴禁暴掠。義貞敗走。馬中矢。僵。高家馳至。以所乘馬。授于義貞。步聞而死。

皇女

淳尉皇女

女

大明三十八年物學賢前編

十六	淳和天皇	女	五百城入
十五	皇女	五百野皇	高城入
十四	皇女	五百野皇	高城入
十三	皇女	五百野皇	高城入
十二	皇女	五百野皇	高城入
十一	皇女	五百野皇	高城入
十	皇女	五百野皇	高城入
九	皇女	五百野皇	高城入
八	皇女	五百野皇	高城入
七	皇女	五百野皇	高城入
六	皇女	五百野皇	高城入
五	皇女	五百野皇	高城入
四	皇女	五百野皇	高城入
三	皇女	五百野皇	高城入
二	皇女	五百野皇	高城入
一	皇女	五百野皇	高城入

尾張昌能 中納言藤原貞嗣之裔也。后醍醐帝時昌能為熱田大宮司。任攝津守。直武者所北條時行自鎌倉逃至尾張。昌能擒之以獻。義貞東征。昌能昌能發兵會之。尊氏之再犯京師。昌能扈駕延曆寺。尋飯熱田。落髮号源雄。正平中發兵討護代。而走之。不知所終。

隱岐廣有 本左大臣藤原道平家士也。稱次郎左衛門工射。建武元年應選射異鳥中之帝益淡敷。異立授從五位下。賜食邑。

將軍家族

小笠原長清 刑部丞源義光之玄孫而加賀見二郎遠光第二子也。生于甲斐小笠原。初屬平知盛。及源賴朝起兵。遠光往會焉。故從賴朝。與父共討源義仲有功。又從討平氏于西海。擊藤原泰衡于陸奥。承久之亂。又擊走官軍。仁治三年卒。年八十一。長清精于騎射。後世相傳以為殄式。

將軍家臣

小山朝政 稱小四郎。下野少椽藤原豐沃之后也。父政光為下野大掾。食州豪相。賴朝及起兵。擢朝政。朝政奉

十六	命未赴會。志田義廣圖襲新朝。率兵入下野。詔朝政及忠綱。忠綱應之。而朝政不肯擊之。賴朝沒義廣黨食邑。授常陸村田下莊地頭。職元曆元年從源範賴討平氏於一谷。尋從至西海。是行也。源義經薦為兵衛尉。文治中。從征藤原泰衡。凱旋之日。賜旗幟。守家士有功者。旌異焉。其冬從賴朝朝京師。為右衛門尉。正治元年。任播磨守。護比企能負圖亂。討而平之。守都官賴綱謀叛。陳謝而得免。承久之役。調遣兵士。雄髮法名生西。曆仁元年卒。時年八十。
----	---

小笠原貞宗 幼名豐松。稱彦五郎。信濃人。任守護。管飛彈。遠江等國事。其家世精騎射術。至貞宗最得其妙。後醍醐帝為聽其昇殿。因師習之。乃賜書褒為本朝武人師表。元弘之役。高時遣拒官軍。既而歸罪自效。帝赦貞宗。從義貞討武藏。餘倉並有功。延元元年。又從義貞討尊氏。後降尊氏。有功。尊氏大賞授。以近江守護。已而攻金崎。又拒源頭家於美濃。大敗而還。貞宗甚崇禪。從元僧正澄受法。大有發悟。因難髮。改名泰山。世呼曰開善寺入道。正平五年卒。

時年五十七。所著有脩身錄。

荻野朝忠 稱彦六。丹波人也。後醍醐帝在船。上朝忠與族人集眾勤王。從

源忠頭攻六波羅不利。還丹波據高山寺城。尊氏擊義朝忠別。進入京師。與諸軍俱攻六波羅。及尊氏反。朝忠應之。與國七年。兒鳴高德起兵。朝忠從之。又據高山寺城。尊氏使山名時氏攻之。朝忠遂出降。

文學

小野篁 隨父赴任。陸奧之地多馬牧。篁馳騁。善其術。後還京師。不復事學業。嗟峨帝聞而歎之。由是慚悔。始志于學。奉文章生試。及弟天長中。與夏野等奉教撰令義解。承和初。為遣唐副使。三年遭風而還。四年再起。志大。使常嗣。換使船次第。遂稱病篤。不復上船。作西道謠詞。多諷諭。指斥時事。嗟峨上皇見而大怒。免為庶人。篁于隱岐。在路作謠行吟。七十韻。當時稱誦之。數年召還。仁壽二年病動。不朝。就家授從三位。薨。時年五十一。篁事母至孝。文章冠絕。當時草隸有二王之迹。後世摸楷焉。然為人。不羈好直言。不為當世所容。忌其才者。野在。小野道風 篁子。善書。通勁神。逸冠絕古今。歷事醍醐。朱雀村。上三朝。至正四位下。內藏權頭。醍醐帝最愛其書。晚患中風。而手顫。所書。彌生奇體。後世稱道風與佐理行成。曰三跡。

成務天皇

和詞祭

辛未元年

年表

三

二

一

他田舍人千世賣

刑部刀自咩

小野小町

和部

朝臣

若櫻部五百瀨

和珥部君子

和氣王

籍懷觀觀

二

一

三

二

一

三

他田舍人千世賣 信濃伊那郡人。景雲二年。喪其守節。賜爵二級。
刑部刀自咩 武藏多磨郡人。嫁族人廣主。廣主死。居喪有禮。事之如生。
小野小町 或曰。參議篁孫也。父曰良真。小町有絕世之姿。長於和歌。為六歌仙之一。紀貫之撰古今和歌集。多收其歌。序而論之。婦人歌詠自當如是矣。
朝臣
若櫻部五百瀨 壬申之役。從天武于東國。持統十年卒。
和珥部君子 壬申之役有功。天武元年卒。
和氣王 父曰三原王。勝寶八年。惠美仲麻呂謀反。王上變。賊平。奉皇救。率兵。曲中宮院。逼帝出宮。時皇嗣未立。王籍懷觀觀。謀漏流伊豆。至相樂郡絞殺。

二四
和氣清麻呂 備前藤野郡人其先自欽石
別命景雲中添于大隅光仁

二六
踐祚召遷之延曆十八年薨年六十七
清麻呂多所通曉最明故事撰民部省

二八
例及和
氣氏譜

三二
和氣廣世 清麻呂子起家補文章生為大
學別當定明經四科置弘文院

三四
和氣眞綱 清麻呂子少遊大學頗涉史傳
弱冠補文章生承和十二年卒

三六
年六十四眞綱稟性敦厚忠孝兼資臨
職事未嘗阿素飯佛乘力助天台眞言

三八
和氣仲世 清麻呂子年十九舉文章生至
從四位上播磨守性至孝奉公

四一
忠謹每寢未嘗趾宮闕
仁壽二年卒百姓慕之

四二
和正隆 稱弘五郎楠正成弟也元弘初
與正成起兵後戰死于湊川

四四
和正朝 稱新兵衛正平中高師直等來
攻正朝與弟賢秀從楠正行詣

四七
吉野行官廷母與同志一百四十余人
俱誓死而進大敗師直於四條擊鼻田

四九
正朝被七矢遂為
阿保忠實所殺

五一
和正賢秀 正朝弟也幼而難髮稱勅發意
從楠正行與細川顯氏等戰住

五二
吉賢秀力戰手斬數十人敵軍敗走追
斬山名兼義又從討高師直正行部下

五四
湯淺太助左衛門降師直而斬賢秀賢
秀眼光如炬怒視湯淺死猶不瞑其日

五六
湯淺得疾
七日死去

五八
和正忠 正朝弟稱五郎正平七年帝親
御軍正忠與楠正儀為先鋒攻

六〇
京師破細川顯氏正忠部卒斬細川賴
春足利義詮走近江車駕進次男山義

六二
詮壽以大兵犯行營勅正儀正忠逆拒
時正忠年甫十六斬土岐康貞帝大褒

六三
獎後會
病暴卒

六四
和正武 正朝弟為和泉守足利義詮兵
犯吉野行宮正武與正儀據赤

六五
坂拒之乘夜襲敵營不克即夜與正儀
具走入金剛山又從攻佐々木秀詮等

六六
斬之正儀後被降于義滿正
武率宗族屢攻之不知所終

六七
和田範長 兒鳴高德父氏和田任備後守
後醍醐帝在船上與高德詣焉

六八
熊山之軍高德劍甚幾死範長以鎌倉
權五郎景政故事激之高德乃蘇息以

六九
餘兵十七騎突進官軍遂拔舟坂賴此
戰焉及遇赤松則村出兵要于峻隘範

七〇
長行戰十八合士卒死傷所
有僅六人遂割腹強刀而死

仲哀天皇
右妃

氣長足姬

皇后

妃大中姬

妃弟媛

皇孫

皇孫

皇孫

皇孫

皇孫

皇孫

皇孫

皇孫

皇孫

皇孫

皇孫

皇孫

皇孫

皇孫

皇孫

皇孫

皇孫

皇孫

皇孫

皇孫

皇孫

皇孫

皇孫

皇孫

皇孫

皇孫

皇孫

皇孫

皇孫

皇孫

皇孫

皇孫

皇孫

皇孫

皇孫

皇孫

皇孫

皇孫

脇屋義助 新田義貞之弟也。北條高時發兵擊義貞。衆咸持拒。計紛紜不

一。從義助言。遂得濟功。為兵庫助。建武元年。與義貞入京師。任兵部少輔。為武

者所頭人。領駿河守護。從義貞東討足利尊氏。義助別奉尊良親王。將兵與尊

氏戰。明年防尊氏于山崎。戰不利。從尊氏。曆寺。與諸軍合。擊敗尊氏。尊氏遂西

走。以功拜右衛門佐。聽昇殿。又從義貞西圍赤松。則村白旗。兵庫軍敗。車駕

再幸延曆寺。義助守東坂。奮戰。敵兵大敗。義貞北走。令之將兵據山。招兵以

為後援。是歲義貞攻高經。足戰沒。明年義助遂與諸軍薄足羽。高經懼。焚城。夜

遁。後村上帝升極。加一級。俄拜刑部卿。明年乃命義助為將。遣之四國。官軍復

振。義助入居國府病卒。

脇屋義治 義助子。每從義助兵間。叙從五位上。任式部大輔。轉左衛門佐。

竹下之戰。年甫十三。陷敵中。被髮撒笠。弓使敵不能識。辨義助引騎。沒入密之。

敵。衆辟易。義治望之。伴為返戰。遂得免還。明年擊取足利高經。斬善光寺城。由

是。威名稍振。興國五年。與兒嶋高德。亡匿信濃。後與義興。襲取鎌倉。正平二十

三年。與義宗起兵。越後。不克。長慶帝建德元年。與上杉頭房。戰。不克。不知所終。

德元年。與上杉頭房。戰。不克。不知所終。

德元年。與上杉頭房。戰。不克。不知所終。

德元年。與上杉頭房。戰。不克。不知所終。

德元年。與上杉頭房。戰。不克。不知所終。

德元年。與上杉頭房。戰。不克。不知所終。

德元年。與上杉頭房。戰。不克。不知所終。

德元年。與上杉頭房。戰。不克。不知所終。

德元年。與上杉頭房。戰。不克。不知所終。

德元年。與上杉頭房。戰。不克。不知所終。

德元年。與上杉頭房。戰。不克。不知所終。

德元年。與上杉頭房。戰。不克。不知所終。

德元年。與上杉頭房。戰。不克。不知所終。

德元年。與上杉頭房。戰。不克。不知所終。

德元年。與上杉頭房。戰。不克。不知所終。

德元年。與上杉頭房。戰。不克。不知所終。

德元年。與上杉頭房。戰。不克。不知所終。

德元年。與上杉頭房。戰。不克。不知所終。

德元年。與上杉頭房。戰。不克。不知所終。

德元年。與上杉頭房。戰。不克。不知所終。

德元年。與上杉頭房。戰。不克。不知所終。

德元年。與上杉頭房。戰。不克。不知所終。

德元年。與上杉頭房。戰。不克。不知所終。

德元年。與上杉頭房。戰。不克。不知所終。

德元年。與上杉頭房。戰。不克。不知所終。

德元年。與上杉頭房。戰。不克。不知所終。

德元年。與上杉頭房。戰。不克。不知所終。

德元年。與上杉頭房。戰。不克。不知所終。

德元年。與上杉頭房。戰。不克。不知所終。

德元年。與上杉頭房。戰。不克。不知所終。

神功皇后

辛巳元年

辛巳元年

辛巳元年

辛巳元年

辛巳元年

辛巳元年

辛巳元年

辛巳元年

辛巳元年

辛巳元年

辛巳元年

辛巳元年

辛巳元年

辛巳元年

辛巳元年

辛巳元年

辛巳元年

辛巳元年

辛巳元年

辛巳元年

辛巳元年

渡里忠景 孫新左衛門。參河人。熊野別當。善射。閉兵。屬新田義貞。部下數効。義貞與弟善助守金崎。城列田數重。忠景至。行在得。論旨。而還。寘。論旨。於。發。沒。水。潛。行至。于。金。崎。及。義。貞。敗。復。還。參。河。復。姓。左。衛。門。

鳥井。弓。藤。左。衛。門。

鳥井。弓。藤。左。衛。門。

鳥井。弓。藤。左。衛。門。

鳥井。弓。藤。左。衛。門。

鳥井。弓。藤。左。衛。門。

鳥井。弓。藤。左。衛。門。

鳥井。弓。藤。左。衛。門。

鳥井。弓。藤。左。衛。門。

鳥井。弓。藤。左。衛。門。

鳥井。弓。藤。左。衛。門。

鳥井。弓。藤。左。衛。門。

鳥井。弓。藤。左。衛。門。

鳥井。弓。藤。左。衛。門。

鳥井。弓。藤。左。衛。門。

鳥井。弓。藤。左。衛。門。

鳥井。弓。藤。左。衛。門。

鳥井。弓。藤。左。衛。門。

鳥井。弓。藤。左。衛。門。

鳥井。弓。藤。左。衛。門。

鳥井。弓。藤。左。衛。門。

鳥井。弓。藤。左。衛。門。

將軍家臣

和田義盛 三浦義明孫也。父義宗。義盛居

邁。多力善射。及東國漸平。論功。行賞。擢

補侍所別當。以故軍國密議。莫不預知

焉。后從義經。征源義仲。又攻平氏於一

谷。元曆元年。從義經。赴西海。參畫軍事。

垣浦之戰。又隸義經。率部下兵。離陣。獨

進。親執弓矢。射海上。船中。无一

倒。一矢。汰二百余步。文治五年。從賴朝

攻藤原泰衡。破阿津賀志山陣。泰衡庶

兄西木戶國衡。退走。義盛追及之。注射

中。其左眼。國衡剝而走。建久元年。以類

朝功臣。十人中。任左衛門尉。數年。又增

食邑。建保元年。泉。小二郎。親平。謀伐北

條氏。義盛之子。義直。義重。姪胤。胤。長。黨。之

義盛。遂督軍。三道。並進。攻幕府南門。分

攻。義時。廣元。策。義直。戰死。義盛。為

二七

和田義秀 義盛子。稱朝夷名三郎。驍勇矯健。膂力絕倫。賴家嘗遊小坪。義

二八

秀。漢沒海不見。頃之。提三鮫魚而出。賴家甚歡。及義盛攻幕府。義秀倒門。進入

二九

南庭。力戰搏鬪。勁捷如神。所當無敵。義盛兵敗。義秀師五百人。駕船走安房。不

三〇

知其所終。

三一

和田朝盛 義盛孫。稱新兵衛。有膂力。練達

三二

戎。親昵。及義盛舉兵。朝盛心知其非。不

三三

能諫止。漢以為憂。其夜入謁。實朝作和

三四

歌。上之。直詣僧舍。雜髮。改名實阿弥陀

三五

佛。留書於家。赴京師。義盛大驚。命義直

三六

追之。號警與俱還。同親族攻幕府。兵敗

三七

脫走。承久之亂。屬官軍。王師敗績。匿得

三九

免。嘉祿三年。於京師被搜捕。

四〇

和田義茂 義盛弟。稱小二郎。驍猛多力。小

四一

披。龐不能支。斬綴太郎兄弟。及太郎子

四二

小太郎。賴朝使義茂擊足利太郎俊綱。

四三

未至俊綱部下。相生六郎。斬俊綱而降。后隨馬而死。

四四

文學

四五

王仁 百濟人。其祖曰狗。狗先日鸞。出自漢

四六

高祖。狗始至百濟。由家焉。王仁博通

四七

經籍。應神帝十五年。遣荒田別。巫別。徵

四八

之。王仁遂從而來。獻論語十卷。千字文

四九

一卷。於是皇太子從學焉。仁能通

五〇

和歌。仁德帝即位。作和歌賀之。

五一

列女

五二

和邇部廣刀自 加賀人。年十四。適山城人

五三

夫亡。居於家側。三十餘年。

五四

齊衡中。褒賜爵二級。

五五

和氣廣蟲 備前藤野郡人。清麻呂姊也。為

五六

及帝落飾。廣蟲亦雜髮。為法弟。名法

五七

均。及弟清麻呂。忤弓削道鏡。遭竄。法均

五八

亦詔還俗。復召名廣蟲。流于備後。光仁

五九

踐祚。復姓名。召還。為典藏。帝嘗嘆曰。諸

六〇

侍從。臣毀譽。紛紜。獨法均不言。人短累進。從四位上。延曆十七年卒。

六一

加部

六二

朝臣

葛城長江 葛城長江。武內子。仁德朝。數奉命討新羅。

葛城圓 葛城圓。大主。玉田宿禰也。安康朝。為大臣。肩輪王弒帝。走匿圓第。雄畧命火其第。圓等皆焚死。

應神天皇 后妃 膳摩漏 天武十年卒。改屋木門。持統七年卒。

仲姬皇后 妃高城入 賀茂蝦夷 伴吹負。持統九年卒。

鴨吉備麻呂 大寶初。為遣唐中使。

上毛野大川 遣唐錄事。甘南備高直 敏達帝之后。父曰清野高直。身長六尺二寸。少為文章生。善屬文。工琴書。承和初。丁母憂。哀毀。過禮。殆至。滅性。三年卒。年六十二。

膳大丘 勝寶四年。隨遣唐使入唐。寶高元度 不詳世系。初遣唐大使藤原清河。入唐大使使。性唐會。后坐事而流。

鎌田政家 初名正清。相模人。藤原秀卿裔。父政宗。為澠口事。為義。孫鎌田莊司。政家繼事義朝。以勇敢聞。從白河殿之役。及為朝出戰。義朝欲自當之。政家止之。義朝不聽。政家乃麾兵士。遮留之。奮身赴敵。平治之亂。信賴獎。政家為右兵衛尉。及重盛攻待賢門。政家從。義平力戰。卻之。義朝攻六波羅。戰不利。欲決死於一戰。政家諫之。義朝從之。政家從至野間。拔平忠致家。義朝遇害。政

去來真稚 皇子 大葉枝皇 子 小葉枝皇 子 荒田皇女 皇女 大原皇女 澁來田皇 女 阿部皇女 淡路御原 皇女 紀冠野皇 女 三野郎女 矢田皇女 鳴鳥皇女 忠道雜郎 姬皇女 幡日吉郎 女 川原田郎 女 五郎女 忍坂大中 姬

家時與忠致。飲。聞。變。將。起。座。行。酒。者。拔。刀。斫。之。政。家。輒。奪。其。刀。還。刺。之。忠。致。子。景。政。自。後。斬。之。時。年。三。十。八。

鏡久綱 佐々木定重之子。隸藤原秀康。赴旗上。與毛利秀光。戰。自殺。

河野通信 稱四郎。本姓越智氏。伊豫人也。父曰通清。身長八尺。形貌異常。最善弓馬。名擅一時。通信壯勇。有策略。源賴朝之起。伊豆。通信與父遙。應之。數破平清盛兵。又戰湯泉。見破。保高直城。敵復合備。後人西寂。兵來圍。通清遂敗。死。通信出奔。赴備後。以計擒西寂。以祭父墓。元曆元年。往屬賴朝。從擊宗盛。後從攻藤原泰衡。于陸奥。有功。後薙髮。法名觀光。承久中。入勤王。王師敗績。義時流。通信於陸奥。貞應二年。卒。于流所。時年六十八。

金谷經氏 新田義貞之族。建武初。從義貞討。傳氏有功。及帝幸吉野。經氏起兵于播磨。以應官軍。後從。脇屋義助。于伊豫。與細川賴春戰。還于備後。不知其所。終。

河嶋維賴 稱左近藏人。越前人也。及新田北出。維賴從入金碓城。尋從義

本朝年代人物掌覽前編

登壇節
女
年表

庚寅元年

助分攻有功守三
峯城不知其所終

將軍家臣

加藤景廉

鎮守府將軍藤原利仁九世孫也。父景員。稱加藤五。有二子。光

員。稱加藤太。景廉。稱加藤次。父子皆有勇名。而景廉最猛。拳力過人。為時所

稱。嘉應中。救誅源為朝于伊豆。景廉亦任遣中斬其首。父景員居於伊勢。與平

氏家臣伊藤藤其構怨殺之。乃携二子走東國。投狩野。伊藤茂光時。賴朝請於伊豆

景廉。兄弟常往來服役。治承四年。賴朝將舉事。遣北條時政。率兵襲自代。平兼

隆時。政攻不能克。遣景廉。遂斬兼隆。石橋之敗。與父兄留而拒戰。賴朝僅而得

入相山。既而景廉兄弟。從武田信義。與目代橋遠。茂戰破之。元曆元年。諫源範

賴。討源義仲。又從攻平氏于西海。自周防。赴豐後。景廉病甚。強起從軍。還擊藤

原。參衡也。景廉兄弟。從而有功。梶原景時。獲罪。景廉坐素相善。沒米邑。祝髮改

名。資運。弟久三年死。

狩野茂光

伊豆著姓也。高祖維景始居伊豆。狩野。伊豆。保元中。擊源為朝。平之。賴朝起義。先襲平兼隆。茂光等竊預其謀。

二五

二四

二三

二二

二一

二十

十九

十八

十七

十六

十五

十四

十三

十二

十一

十

九

八

七

六

五

四

三

二

一

二六

二七

辛未空位
壬申空位

四一

四二

四三

四四

四五

四六

四七

四八

四九

五〇

石橋之戰不利。賴朝匿於相山。茂光索賴朝蹤而行。驅幹元肥。路險敵迫。氣喘不能進。自裁而死。外孫田代信綱。自傍斬之。

梶原景時。鎮守府將軍。平忠通裔。而太郎景清子也。為人材武。狡獪。隱隱有口。舟。嗜和歌。賴朝建義旗於石橋山。聲勢益廣。八州將士。望風弭從。及降賴朝。誅景親。而赦景時。愛其才幹。日親任之。景時計殺平廣常。賴朝壯之。元曆元年。討源義仲。景時隸義經軍焉。一谷之戰。二度驅籠之梅等之事。世傳稱之。文治元年。義經治舟師於渡邊。福島。景時欲。船。設。逆。檣。義經。點。其。議。景時。街。之。義經。經。師。五。艘。冒。風。濤。抵。屋。嶋。攻。而。拔。之。后。五。日。景。時。等。軍。二。百。余。艘。繼。至。景。時。欲。害。義。經。功。本。書。於。賴。朝。賴。朝。得。書。而。怒。四。海。平。定。景。時。還。鎌。倉。賴。朝。命。景。時。擊。義。經。景。時。自。圖。不。敵。遜。辭。賴。朝。乃。遣。土。佐。房。昌。俊。襲。擊。義。經。正。治。中。景。時。請。結。城。朝。光。於。賴。家。朝。光。聞。而。大。懼。問。計。三。浦。義。村。義。村。乃。會。者。病。於。鶴。岡。社。同。盟。連。署。六。十。六。人。訴。景。時。罪。景。時。不。能。弁。晰。悉。將。親。族。奔。米。地。一。官。未。幾。潛。還。鎌。倉。賴。家。怒。使。義。盛。等。逐。之。明年。正月。舉。族。赴。京。師。賴。家。遣。能。員。等。追。擊。景。時。父。子。行。到。駿。河。清。見。關。敗。死。

景時父子行到駿河清見關敗死

仁德天皇
白妃

葛城豐之
皇后

天田皇后
妃日向豐

長養
皇子

住吉佛皇
子

大草香皇
子

草香藤原
皇女

皇女
年表

癸酉元年

十一
十
九
八
七
六
五
四
三
二

梶原景季

景時子。林源太。為左衛門尉。最
善射。賴朝嘗選親臣十一人。直
寢室。景季預焉。賴朝有二駿馬。池月磨
墨。及遣諸將討義仲。景季面請賴朝賜
池月。賴朝賜磨墨於景季。池月於佐々
木高綱。及抵宇治河。與高綱相繼先登。
一谷之戰。與父弟力戰。手斬菊池高望。
文治中。從賴朝擊藤原泰衡。景季與父
景時弟景高並善和歌。其所作多在
人口。與父因敗死。狐崎。年三十九。

金子家忠

林十郎六郎家範子也。其先出
氏焉。保元中。家忠屬源義朝。襲白河殿
高間四郎。進而交捕家忠。倒之。四郎弟
三郎。馳來將斫家忠。家忠刺殺三郎。并
斬四郎。須藤家未前。欲射之。為朝日勇
士也。舍之。我他日得志。以彼為臣。平治
之亂。屬義平。攻六波羅。力戰。刀折。乞之
足立。遠元。遠元令解從士佩刀。援之家
忠。大喜。進入敵軍。多獲首級。及三浦義
明據衣笠城。家忠與畠山重忠等率家
屬三百攻之。奮勇血戰。遂奪二門。

金澤貞時

北條氏之族。逆擊新田義貞于
武藏。見敗。又戰山內。自被七創。
還見高時于東勝寺。高時褒其戰力。授
以相摸守長門。筑前。而探題作畧狀。與
之。貞時馳赴
敵陳而死。

高師直

其先日峯緒。承和中始賜高階姓。
九世孫。以高氏焉。世仕足利氏。父
師重。師直為尊氏執事。元弘初。尊氏起
兵。從滅六波羅。收京師。以功為武藏守。
延元元年。尊氏稱兵。犯關。又從擊敗之。
三年。田源頭信於男山。襲殺頭信。兄頭
家於安倍野。正平三年。正行進逼京師。
尊氏命師直往拒。正行等悉相刺而死。
師直遂進犯吉野。縱火行宮。還。師直已
屢建戰功。素為尊氏所親任。威權無比。
雖親勲將士。視其驕笑。以為喜懼。性亦
驕溢。奢侈擅張。尤威逞其渠壘。
怨苦者多。鹽屋高負妻有姿色。師直百
計調之不聽。遂寃殺高負及妻子。上杉
重能。畠山直宗。與師直不睦。二人數謗
之。直義欲收師直。師直進兵迫尊氏。欲
獲諛者。尊氏不獲已。罷直義政務。放流
重能。直宗。又命攻直冬。於是師直驕肆
益甚。遂逼殺重能。直宗於涼所。及直義
歸順。將士憤師直者。悉往應之。尊氏為
直義所破。師直從走播磨。保書寫山。直
義遣石堂賴房等來攻。又使畠山國清
等來援。尊氏師直大敗。狼狽入松岡城。
及和議成。師直等髮首出降。師直改名
道常。師泰改道勝。乘馬從尊氏後。
上杉顯能以其父讐。令兵士斫之。
高師泰。師直弟。為尊氏侍所。建武二年。從
東討時行。延元元年。別將攻金碓。

十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九

四十 城陷遂執皇太子。三年源頭家師
 四一 大兵破鎌倉。累捷而進。師泰將兵至美
 四二 濃。置陣于里地。藤河兩水之間。頭家不
 四三 能進。引兵向伊勢。師泰追至雲津川。大
 四四 破之。三年。攻補正儀。管石河河原。大行
 四五 劫奪。五年。攻三隅某。連其五城。明年與
 四六 師直俱被殺。師泰威權雖未
 四七 及。師直其凶虐亦有可惡者。
 四八 高師冬 師直從弟也。為師直所子養。為播
 四九 磨守。事基氏。與上杉頭憲管領東
 五〇 國事。出鎮下總。野城。與國元年。源頭信
 五一 來討。師冬燒管夜逃。四年。攻源親房於
 五二 小田城。後上杉頭憲起兵。上野。應直義
 五三 師冬與基氏往攻之。軍士叛。亂擁基氏
 五四 去。師冬走甲斐。據洲沢城。
 五五 為詎訪隆種所圍自殺。
 五六 高氏鎮 稱三戶七郎。師冬族子也。師冬之
 五七 敗。被傷逃去。守都官氏綱推氏鎮
 五八 為將。以應尊氏氏鎮
 五九 在軍。猝發。狂疾自殺。
 六〇 文學
 六一 葛井廣成 本姓白猪史。養老中。為遣新羅
 六二 使。賜今姓。嘗奉試對策。天平中。
 六三 新羅來聘。廣成等往筑紫。檢校供官之
 六四 事。上言。質失禮之狀。放還其使。累進。從
 六五 五位上。寵遇甚篤。勝
 六六 宝初。為中務少輔。
 六七

歌人

六八 柳本人麻呂 其先出自天足彦國押人。命
 六九 詳官位。妙作和歌也。稱歌聖。高振神妙
 七〇 之思。獨步古今之間。與長新田高市諸
 七一 皇子遊。倍駕紀伊伊勢。雷岳。言野遊。近
 七二 江石見筑紫諸國。所過無不詠歌。晚居
 七三 石見而終墓
 七四 在大和湊郡。
 七五 孝子
 七六 風早富麻呂 安藝加茂郡人。德行懿美。竭
 七七 力孝養。天長十年。叙階免租。
 七八 列女
 七九 上毛野形名妻 史失姓氏。舒明帝九年。形
 八〇 名。壘為賊所困。計无所出。妻乃飲以酒。形
 八一 名。酣寢。妻親佩其劍。令婢妾數人。鳴弓
 八二 弦。形名醒起。取仗而進。賊
 八三 以為軍眾。猶多。解而而去。
 八四 鎌田政家妻平氏 長田莊司忠致女也。尾
 八五 政家。妻聞變。至其死
 八六 所。遂伏政家。及而死。
 八七 隱逸

優待天皇
后妃

鴨長明 稱菊大夫。鴨社氏人。祖季繼。父長明。皆稱宜。長明通管絃。善和歌。後

草香降媛

鳥羽上皇召為和歌所寄人。長明嘗奏請襲父祖補社司。不許。以故歎々不樂。

皇后

杜門息交。作葵歌以寓其意。遂剃髮為僧。改名蓮胤。入大原山。時年四十。建曆

死黑姬

中。往鎌倉。實朝素聞其名。數被延接。無幾。還京師。創意作方丈室。遂入日野

嬪大姬

外山居焉。登山臨水。採掘自拾。著方丈記。世傳誦之。後上皇欲復召入和歌所。

高鶴姬

長明上和歌辭。初及後成撰進十載集。採長明歌僅一首。當撰新古今集。長明

皇子

所進歌皆所取云。所著有望玉集。无名抄。發心集。文字錄。四季物語。海道記。

押磨皇子

○與部

皇女

文學

青海皇女

善道真負 右京人。父伊與部家守。真負十

一椀飯量

行。補文章得業生。大同中。課試登科。天

皇女

長初。奏請賜姓善道。病歿。與撰令義解。

年表

兼和中。累進從四位下。以明經宿儒。賜

唐子元年

荒田。尋為東宮學士。真負以三傳三禮

六

為業。兼善談論。而不學漢音。至於教授。

五

用。世俗踏訛之音。情在進取。不能枯退。

四

久之。拜此官。及皇太子廢。沒備後權守。

三

未幾。召還。諸儒奏言。乃命真負於大學

二

講公羊傳。後卒。

一

善淵永負 初名福負。本姓六人部。火明命

反正天皇

後也。世居美濃。厚見郡。後與弟

后妃

變成等。遷隸左京職。賜今姓。貞觀中。擢

夫人津野

直講。為助教。十四年。遷大學博士。兼越

弟媛

中守。光孝帝誦御註孝經。永負為侍讀。

皇子

進正五位下。仁和元年卒。於官。年七十三。

高部皇子

慶滋保胤 賀茂忠行子也。家世業陰陽。保

皇女

胤。亂。夙棄其業。為書生。潛心文學。

香火姬皇

改姓為慶滋。遊菅原文時門。才識日進。

圓皇女

奉試登科。聲名冠絕當時。最工詩。具平

財皇女

親王好文章。常從保胤學焉。任大內記兼

年表

近江掾。資性慈仁。篤信佛教。身雖立朝。

丙午元年

而志在山林。不營居宅。常寓於人而居。

六

和二年。遂剃髮改名寂心。世稱內記入

五

道。長德三年。終於東山。如意輪寺。所著

四

有白本極樂往生記。

三

方技

吉田宜

鹽乘津彦命後也。初為僧。名惠俊。

言宜

授務廣肆。宜好學。最長醫術。和銅

中改賜今姓

為醫博士。天平初。始使陰

陽醫道

天文。曆數諸博士。教授弟子。宜

為其首

尋為圖書頭。進正五位下。兼典

三

三

三六 多治比池守 左大臣嶋長子也。累官至大納言。進從二位。天平二年薨。

三七 丹墀門成 父曰豐永。仁壽三年卒。于大和守。門成雖无學術。長于吏事。所

三九 橘良基 左京人。左大臣諸兄之后也。父安吉。良基幼而篤學。早有風概。明練

四一 高向玄理 初稱高向漢人。又名黑麻呂。推古十六年。詔受學於陪。留學三

四二 橘奈良麻呂 左大臣諸兄子也。寶字元年。唐押使。與郭文舉答問。遂卒于唐。

四三 高倉福信 武藏高麗郡人。其先出自高麗太子。及黃文王。謀行廢立。伏誅。一說配

四四 平高棟 葛原親王長子也。身長六尺。美鬚。教常誦佛經。進正三位大納言。貞觀九年薨。年六十四。

四五 平季長 高棟子。進至從四位下。右大弁。寬平九年卒。

安康天皇

后妃

中帶姬皇

生表

甲午元年

三二

平惟範 高棟子。有文才。善詩。宇多帝敕撰弘仁以后詩。延喜二年。與藤原時

田中多大麻呂 為東海道節度副使。陸奧守。尋拜鎮守將軍。繁伊治

橘清友 參議奈良麻呂之第三子也。少而沈厚。涉獵書記。身長六尺二寸。眉

平貞盛 父國香。貞盛有勇畧。善射。及國香為將。門戰不利。既而為常

平維茂 鎮守府將軍繁盛子也。少有勇畧。伯父貞盛甚奇之。養為子。貞盛多

實方 久不能斷。互生嫌隙。集兵相攻。維茂遂繫諸任。敗之。自是維茂威名大著

羽介 拜鎮守府將軍。卒。年八十。世祚余五將軍。維茂篤信佛教。練習法華。屢從

僧源信 問法焉。

三三

本朝年代人物掌覽前編 上

清寧天皇
年表
庚申元年

五 四 三 二

維義等各率其眾據城通信亦自伊豫往屬之。教經攻之。一晝夜拔之。三月源義經攻一谷。平軍大敗。宗盛奉帝從屋嶋。四年。義經攻屋嶋。教經遂認義經。義經從士遮前逸之。東兵安藝家村與手下力士二人齊進當之。教經蹴其一人。倒海。双挾二人。遂入于海。時年六十。

平清盛

刑部卿忠盛長子。母白河帝宮女。獲幸有身。帝出之。賜忠盛。清盛生。

而夜啼。父母患之。一夜其母夢和歌有祥。因名曰清盛。保元元年。崇德上皇作亂。清盛與源義朝討而破之。三年。藤原信賴。源義朝反。討上皇。殺信西。勅遣清盛討信賴。誅之。仁安二年。隳從一位大政大臣。三年。削髮法名清蓮。尋改靜海。治承元年。殺西光父子。取康親成。留俊寬等流之。三年。幽法皇於鳥羽殿。取關白基房及太政大臣師長流之。四年。源賴政奉高倉王而謀討平氏。靜海遣兵擊敗之于宇治。遷都于摂津福原。養和元年。靜海得疾身熱如火。宛轉煩躁。七日而薨。歲六十四。

平基盛

不詳其所出。清盛養以為子。保元元年。年十七。以檢非違使率兵守

宇治。路虜源親治。再往宇治。後出為大和守。將赴任。路沒於宇治川。溺水而死。

顯宗天皇
后妃
難波小野
皇后

乙丑元年

年表

三 二

平宗盛

清盛子。安德帝即位。宗盛憑恃外感之重。益逞威權。壽永二年。源義

仲師帥入京。宗盛奉帝航海。明年筑城於一谷。法皇下詔。賴朝攻一谷。於是範賴義經來攻。宗盛奉帝如屋嶋。通盛忠度。經正。敦盛。和。章。經。俊業。盛。盛。俊等戰死。二年。義經攻屋嶋。平軍不能支。入海避之。二位尺抱。帝扶劍。墜投海而死。教盛。知盛。經盛。資盛。有盛行。盛等相繼溺死。東兵捉宗盛。清宗。送于京師。終送于鎌倉。賴朝不忍致刑。呼宗盛曰。讚岐權守。改名末國。又還京師。往抵近江。從原義經。遂斬之。時年三十九。傳首京師。梟于獄門。擗樹。

平知盛

清盛子。及源義經起兵。迫江。與姪資盛等將兵數千。擊之。義經敗走。

養和元年。擊源行家於美濃。羅疾而還。壽永三年。東軍將義經陷一谷城。知盛守城。東門敗走。追兵迫。子知章力戰而死。知盛乘良馬。獲免。濟海上。既而帝崩于海。宗盛見虜。知盛聞而垂泣。溪耻之。遂與叔父教盛。並自刃而死。年三十四。平重衡。清盛子。承安四年。以仁王事起。與維盛等將兵二萬餘。敗源賴政於宇治川。十一月。率兵向南都。攻東大興福二寺。僧徒大敗。養和元年。與維盛等擊源行家於尾張。墨股破之。壽永二年。平族奉帝至屋嶋。源義仲遣其將高

仁賢天皇

后妃

春日大塚

皇后

和珥捷君

皇女

高橋大塚

皇女

朝幡皇女

手白香皇

女

樟水皇女

橘仲皇女

真推皇女

春日山田

年表

戊辰元年

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

梨高信等來攻重衡與通盛教經拒之明年一谷陷而走庄家長父子急迫之既而為虜致于鎌倉賴朝引見景時請速斬首賴朝乃屬狩野宗茂豫使侍女千手及美女名伊王侍之明年斬之於木津川上時年二十九

平家貞 鎮守府將軍貞盛之裔進三郎大夫家房子也臣屬平氏及源義平攻六波羅家貞與子貞能力戰有功日向大郎通良及于肥前遣家貞討之踰歲城陷斬首三百餘級

平貞能 家貞子為筑後肥後等守清盛時以為腹心治承四年將兵赴肥後攻高直城菊地高直食盡而降又從宗盛在太宰府緒方惟義發兵來攻貞能防之不利而退後逃亡削髮更名因守都官朝綱允命賴朝赦之稱入道

平盛俊 清盛之族父也又盛國盛俊為人長壯多力任越中守平治之亂從重盛拒源義平於六波羅養和初擊源行家于墨股有功又從平維盛擊木曾義仲于篠原復與行家戰志雄宗盛之西走盛俊率族徙之一谷城陷盛俊力鬪而死

平盛嗣 盛俊子稱越中次郎兵衛養和二攻源行家壽永二年攻木曾義

武烈天皇

后妃

春日皇子

皇后

年表

巳卯元年

一 二 三 四 五 六 七 八

仲又與義仲將矢田義清戰于水島大敗之手斬義清後賴朝斬之于由比濱

平時忠 建春門院兄也祖知信父時信時忠應保二年坐兄詛國家流于出雲及帝登遐得還京師嘉應元年坐奏藤原成親罪狀不實又流出雲明年徵還京師治承元年延曆寺僧徒蠢動不時忠於縉紳中頗稱氣狹應選而行遂得事解三年進正二位壽永二年拜權大納言是秋從帝鎮西帝崩于海上也劍璽亦從而沒海惟內侍所尚存已還京師與義經結誓以請之義經從女大悅遂還其文書文治元年廷議流時忠於能登五年終比所年六十

平賴盛 刑部卿忠盛第五子清盛異母弟也平治元年藤原信賴與源義朝作亂迫皇居帝幸六波羅賴盛進入郁芳門與義朝戰大敗積既而信賴等敗匿仁和寺賴盛與兄教盛圍而虜之壽永二年向山階以源賴朝諭不從西狩元曆元年賴朝招致鎌倉文治元年割髮改名重蓮明年薨年五十五

平重盛 太政大臣清盛長子資性忠謹沈勇有度量中外屬意保元元年上皇集於白河殿重盛率禁軍從清盛攻之白河殿遂陷平治元年從熊野至安部病聞京師變還京師迎家與於六波羅攻藤原信賴信賴伏誅仁安二年靜

繼體天皇
 后妃
 手白香皇
 元妃尾張
 目子媛
 妃三尾推
 子媛
 妃坂田廣
 媛
 妃息長麻
 績娘手
 妃淡田關
 媛
 妃三尾倭
 媛
 妃和珥美
 媛
 妃廣媛
 皇子
 大郎皇子
 耳皇子
 厚皇子
 梳子皇子
 鬼皇子
 中皇子
 皇女
 出雲皇女

海以重盛子資盛故陰使武士辱攝政
 基房重盛逐資盛於伊勢治承元年延
 曆寺僧徒奉日吉神輿入京師重盛守
 陽明侍賢都芳三門卻之先是藤原成
 親結黨竊謀平氏事泄被捕因重盛之
 言成親得不死許海志怒不止欲誅法
 皇重盛諫之靜海跋扈日甚重盛居常
 憂懼及妹尾兼康夢與重盛所夢符重
 盛益感愴無何重盛詣熊野社祈死既
 而寢疾法皇臨觀剃髮法名證空八月
 朔日薨年四十二初方相撲節行事稱
 人中有竊言此君多福至近衛大將儀
 貌心術亦過人遠矣澆季之世不可得
 見之人也恨早世矣如所言庭中多植
 菖世稱小松殿又時
 人稱曰燈籠大臣

平維盛 重盛子為人美姿儀呼曰櫻栞
 將治承四年源賴朝起兵維盛為
 追討使進陣富士川賴朝進屯賀鳴武
 田信義夜自陣後襲維盛宮平軍聞水
 鳥驚噪以為敵兵大至而走維盛初無
 走意忠清因勸而去維盛等還至勢田
 靜海大怒欲逐斬維盛忠清既而事輟
 明年與重衡擊源行家於墨股大敗之
 壽永二年將十萬餘騎北討源義仲進
 攻燧城平泉寺長史齊明為之內應北
 兵不能支棄城走平軍追擊之遂敗績
 於砥並山收潰卒歸京師既而京師失

神前皇女
 茨田皇女
 馬來田皇女
 女
 其用皇女
 茨田大娘
 皇女
 白坂治日
 施皇女
 小野推郎
 皇女一名
 長石姬
 大娘子皇女
 女
 赤姬皇女
 推後皇女
 女
 田娘皇女
 幸表
 丁亥元年

九 八 七 六 五 四 三 二 一

守帝幸西海維盛遂登高野
 山別髮為僧時年二十六

平宗清 稱平左衛門負盛八世孫左衛
 門尉李宗子也仕平賴盛永曆元
 年賴朝亡宗清會之與朝長首併送六
 波羅清盛囚賴朝於宗清家宗清遇賴
 朝甚厚就池尼告之而得免矣賴朝寢
 德之平族西奔宗清從賴盛留京師賴
 朝思池尼之恩招致賴盛及宗清於鎌
 倉宗清辭以疾送賴盛而辭去直往屋
 寫仕宗盛平氏亡
 宗清遂不知所終

平知康 事後白河法皇善擊鼓世呼子鼓
 判官輕俳好詼諠法皇寵之永
 曆元年源義仲入京師法皇遣知康戒
 救義仲義仲受詔不敬法皇乃命知康
 為都頭就法住寺修戰備義仲兵薄宮
 門知康左執金剛鈴右持鉞登垣翔舞
 嬉笑遙見義仲大罵義仲兵乘風縱火
 知康狼狽棄鈴逃去遂大奔潰知康欲
 詭說免咎之鎌倉遂留居鎌倉至賴家
 時稍得親昵及賴家見廢得還京師去
平成輔 權中納言惟輔之子帝謀誅高時
 及幸笠置被執殺
 於相摸早河尻

多治見國長 稱四郎二郎土岐賴兼之族
 也大謀已露小串範行兵圍

十一 宅小笠原通弘通依其家即執弓矢上門樓射墮二十余人乃仰刃投樓死國長與其下二十二人交割而死

將軍家族

武田信義 刑部丞源義光曾孫也幼名竟光丸治承四年襲管冠者太田

切城管冠者望風恐怖縱火自盡進至駿河虜目代橋遠茂斬長田入道父子

遂會賴朝于黃瀬川既而平維盛忠度等進軍于富士川西夜半信義潛出間道襲敵管後平軍遂還京師賴朝命守駿河後因子忠賴復被疏斥文治二年卒年五十九

武田信光 幼名光壽信義子生于甲斐石和因稱石和五郎及義放起從

兵赴駿河有戰功屬範賴討義仲又討平氏於西海從賴朝擊藤原泰衡為賴朝所寵異常賴家立阿野全成謀反信光捕之送鎌倉建保中和田義盛作亂

信光與戰有功加封邑承久之亂與諸將師兵遂陷京師信賴祝髮改名光蓮世稱伊豆入道最精射通習犬追物流鏽馬之儀世稱信光長清海野幸氏望月重隆曰弓長四天

王宝治二年卒七十八

安閑天皇 后妃 春日山田 皇后 妃許勢 手媛 起許勢香 香有媛 妃物部宅 手表 甲寅元年 二

安閑天皇 后妃 春日山田 皇后 妃許勢 手媛 起許勢香 香有媛 妃物部宅 手表 甲寅元年 二

將軍家臣

平廣常 出自高望父曰常隆任上總介廣常襲為上總權介世稱介八郎保

元平治之亂屬源義朝以勇聞源賴朝將起兵遣安達盛長傳檄於廣常廣常

實持兩端親望成敗數日之後始師兵二五往會于隅田川遂傾心事之及平

維盛敗于富士川賴朝欲進兵踵後時佐竹氏擁眾在常陸廣常與千葉常胤

等勸先滅之賴朝赴常陸廣常有功廣常恃功驕恣漸賴朝被誅博後介攝原

景時圖之子良常稱小權介父子並為景時所殺賴朝後知其冤

田代信綱 伊豆人也姓藤原氏因其所居一侍賴朝石橋山之戰追兵急至信綱

射而卻之壽永中討木曾義仲尋戰于鳴谷及屋

大佛負直 民部少輔宗泰子也後醍醐帝之幸笠置六波羅遣軍攻之不

免高時命負直及尊氏等將兵往援之會城已陷轉攻赤坂城拔之而還及新

田義貞討鎌倉負直又將大兵拒極樂寺坂道遂突腸屋義助陣酣戰而死

大佛高直 陸奥守維貞子也元弘之役將大兵攻捕正成於千劍破城每

大佛高直 陸奥守維貞子也元弘之役將大兵攻捕正成於千劍破城每

宣化天皇

后妃

橘仲皇后

妃大河内

稚子孫

皇子

上殖葉皇

子

皇子孫

火烟皇子

皇女

石姬皇女

小石姬皇

女

倉羅藤卷

手表

丙辰元年

二

三

四

本朝年久人物等覽

戰輒敗死傷無算及六波羅潰高直等
乃解圍退去為官軍所夾擊僅而免保
南都般若寺
遂誅于京師

文學

高丘河内 本姓桑浪父沙門永天智帝時
自百濟没化河内初為播磨大
目造正倉和銅中賞功進位一階賜絕
布養老中為文章博士神龜初改賜今
姓勝室中為大學
頭至正五位下

橘廣相 字朝綾左大臣諸兄五世孫父峯
範廣相初而補文名九歲許昇殿
乃賦詩長而博學負觀中補文章上勅
海使來奉敕宴使人賦詩皇太子始誦
千字文廣相以學士侍讀光孝帝即位
進從四位上帝誦文選又侍讀尋兼文
章博士任參議轉左大弁兼近江守進
正四位上寬平中卒年五十四以待誦
勞贈中納言從三位廣相歷任三朝近
侍左右省中眾事莫不幹理博涉群書
皆橫看讀過授萃抄纂以備遺忘獻策
之覽一代藏經七日而竣有集八卷
蒙宇多帝勅撰踏歌記一卷是善嘗作
高雄山鐘銘廣相序之敏行書之

橘直幹 長門守長盛子也對策及第任大
內記為大學頭天曆二年授文章

欽明天皇

后妃

石姬皇后

元妃倉羅

綾橙

妃日影皇

女

妃蘇我堅

豐媛

妃蘇我小

婦君

妃春日糠

皇子

箭田珠勝

大兄皇子

櫻井皇子

聖部穴穗

部皇子

石上皇子

倉皇子

今昔皇皇

子

梳子皇子

石上皇子

山背皇子

橘本稚皇

博士奉勅策試文章得業生八年上書
請兼任民部太輔闕書奏讀至依人異
事數語帝艱然後禁闕火帝問待
臣曰直幹奏狀免災乎時人榮之

橘正通 右大臣氏公六世之孫父實利正
通少志學師事源順與藤原在衡
同入大學情好款密而在衡官爵累遷
遂進公卿正通稍老歎其不遇心常鞅
鞅抱避世之志在具平親王坐作詩序
源為憲誦之大怪後果遁跡不知所終
或曰正通將妻子赴高麗國王
重其才恩遇優渥漸至顯貴

歌人

橘永愷 左大臣諸兄十世孫遠江守忠望
子永愷為文章生号肥後進士性
睿和歌此時長能歌名高於世永愷就
問作和歌之要遂師事之和歌之師資
此為始焉後剃髮名融因又改能因居
撰津古曾部世称古曾部入道實綱世
任于伊豫能因從焉曾大早百姓愁苦
能因乃進和歌祈雨於三鳴神須臾天
興雲大雨三日復遊陸奥過白川閣作
歌以為絕唱所著有玄玄集又輯歌枕
平兼盛 是忠親王曾孫父篤行兼盛善和
歌頗有文才少入大學奉試及第
至從五位上駿河
守正曆元年卒

橘本稚皇

孝子

建部大垣オホキ信濃更級郡人。為人恭順。事親有孝。景雲二年。免其田租。
財部繼麻呂オホキ加賀能美郡人。有至性。承和四年。勅叙三階。免租終身。

義烈

平康盛ヒラノ右衛門尉源有綱士也。有綱義經女督也。及義經敗。賴朝遣時定殺有綱。建久二年。康盛潛抵鎌倉。圖復其讎。為景時所捕。賴朝命斬之。梟其首。
平家繼ヒラノ筑後守家直子也。居伊賀山田郡。祝髮稱平田入道。及平族赴西海。家繼慨然糾合同志。據平田城。卒。賴朝伊賀守護惟義。轉入近江。秀義戰斬之。既而及為惟義所敗。死之。以其起滅日淺。世呼曰三日平氏。

列女

橘逸勢女キナノ曾逸勢得罪。遇貶。悲泣徙步。以從之。及逸勢死。乃收屍葬之。盧後。又負其屍以還。人異之。為孝女。
田道妻タノチ不詳姓氏。仁德帝五十五年。田道討蝦夷戰死。從者取其手纏。歸授田道妻。妻大悲慟。即抱手纏而縊死。

子 橘麻呂皇 皇女 推古天皇 大宅皇女 大伴皇女 肩野皇女 舍人皇女 穴穗部皇女 人皇女 春日山田皇女 年表 庚申元年

高橋波自女タカハシ對馬島上縣郡人。孝義之至。悲感行人。景雲二年。復其終身。

方伎

丹波雅忠ニハタ阿知使主裔也。世居丹波。曾祖醫心方三十卷。上之。雅忠繼父祖業。登有聲譽。為醫學得業生。長元七年。奉課試。既而為典藥頭。補右衛門佐。至丹波權守。永承中。帝遠豫。雅忠進藥。有效。褒授從四位下。承曆中。高麗王妃疾。王以厚幣求雅忠。朝廷不許。報業有。鶴何入。雞林之雲。語。自是世於雅忠。為日本扁鵲。寬治二年卒。年六十八。雅忠嘗夢有童子告之。方書遂免焚云。

叛臣

橘逸勢キナノ右中弁入居子也。為人放誕。不拘細節。最妙隸書。官門榜題。多成其手。延曆末。從遣唐使入唐。唐人呼為橘秀才。叙從五位下。以老病家居。不仕。承和七年。起為但馬權守。嗟哉。上皇不豫。東宮帶刀伴健岑。以為登遐。非遠。國家之危。在可待也。乃與逸勢謀奉皇太子。慎真奔東國。作亂。竊語阿保親王。既而上皇崩。親王告嗟。我大皇太后。后即白之。乃使六衛府守宮門。遣藤原富士麻呂。

十二 十一 十 九 八 七 六 五 四 三 二 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二

本朝年代人物掌覽前編 (上)

敏達天皇 后妃 廣姬皇后 額田部皇 后 夫人春日 老女子 夫人太鹿 鬼名手 皇子 押坂彥人 大兄皇子 竹田皇子 難波皇子 春子皇子 大派皇子 尾張皇子 皇女 逆登皇女 菟道磯津 貝皇女 菟道具賴 皇女 小墾田皇 女 鸕鷀草皇 女 田原皇女

呂等率勇敢之士。田二人宅捕之。伴水上被并執。又召伴武守。伴甲雄。奪兵仗各繫之。永名枝等以逸勢近親自解兵仗待命。大納言愛發。中納言吉野以其黨繫于院中。左大辨正躬王等鞠問。逸勢不服。改姓非人。滅死。配流伊豆。行抵遠江板築。死。于逆放。嘉祥四年。追贈正五位下。歸葬。仁壽三年。又贈從四位。平將門也。稱相馬小次郎。勇悍过人。最工射騎。少仕。授相忠平。永因其薦。為檢非遣使。忠平不之省。將門失望。憤怨。去赴關東。居下總。豐田郡。率徒屬。來往常陸。下總之間。以攻剽為事。時伯父常陸大掾國香。及源護三子。皆將門所殺。將門叔父下總介良兼。與國香子左馬。負盛擊將門不利。天慶二年。將門遂據下總。及藤原玄朔降。執常陸介維幾。奪印。鑄。焚掠街市。時有興世王。凶險好亂。通好將門。恸心計畫。將門大喜。攻下野守藤原弘雅。迎降。至上野。逐介藤原尚範。乃入府廳。改易官吏。適有人來。稱入幡使者。揚言於眾曰。朕將讓位於蔭子。將門可奏樂來迎。將門再拜受命。一軍忻躍。將門自稱平新皇。於是歸下總。遣偽官於猿島郡石井卿。以磯橋擬京師。山崎。大井津。擬大津。置大臣以下文武百司。唯曆博士不得其人。諸國長吏望

櫻井皇女 桑田皇女 大姬皇女 總手皇女 生表 壬辰元年 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四

風道亡。世呼為外都鬼王。三年。以藤原忠文為征東大將軍討之。時貞盛在常陸。與下野。榎原秀卿。率兵襲將門。將門走保島之北山。單騎突陣。負盛射斃之。傳首京師。黨與皆伏誅。

○曾部

朝臣

蘇我稻目 石川病禰玄孫。高麗之子也。宣化元年。為大臣。欽明時。百濟聖

明王獻佛像。帝使稻目至之。遂捨向原家。為寺。是為佛宇之始。三十一年。薨。

蘇我倉山田石川麻呂 大臣。馬子之孫。倉四年。與鎌足合謀。誅入鹿。大化五年。因異母弟日向。誅自盡。

蘇我赤兄 大臣。馬子孫。倉麻呂子也。齊明時。收有馬皇子。誅之。天智四年。為左大臣。是歲。大友皇子起。盟赤兄等同盟。天武即位。罪處流。

宗信 世為吉野。修行。欽法印。住吉水院。嘗助護良親王。據吉野。亂。平。還。往。走。

孝子 僧某 不詳名字。事母至孝。嘗為母犯禁。被執。白河上皇賜金帛。赦還焉。

四一

曾我祐成

小字一萬。稱十郎。伊東祐親之孫也。父河津祐泰。為從父工藤

用明天皇
穴穗部開
人皇后

祐經所殺。建久四年。賴朝獵于富士野。祐經從焉。祐成與弟時致。定計往富士

野。是夜祐經召倡妓。共吉備津祠官大

藤內宴飲。大醉酣寢。兄弟拳炬相視。大呼曰。祐成時致。為父報讐。祐經驚覺。將

皇德太子
子山背大

執刀而起。兄弟揮刀交下。遂寸斬之。并

麻呂子皇

殺王藤內。時五月二十八日。雷雨闇黑。管中騷擾。祐成與新田忠常接鋒。遂為

來自皇子
殖栗皇子
田目皇子
茨田皇子

為殺時年
二十二

皇女
酢香手姬

曾我時致。小字管王。稱五郎。與兄祐成定

皇女

突入將軍堂。小舍人五郎。凡等禽。賴朝愛其膽氣。欲宥死。祐經。犬房丸。良

羊表
丙午元年

訴請殺。乃斬之。時年二十。後人為立祠於富士野。

逆臣

藤我馬子

大臣稻目之子也。性習武略。且有才辨。漢敬佛法。敏達元年。為

大臣。十三年。造佛殿於石川宅。於是佛

法始行于世。十四年。馬子有病。卜之。卜

者曰。父稻目所祭之佛。為崇也。馬子奏

其占狀。詔令拜其佛。祭之時。國內多疫

死。物部守屋奏滅佛法。自造寺燒佛像

塔殿。毀辱馬子及其徒。執三尸而禁銅

崇峻天皇
后妃
妃大伴小

之。馬子啼泣。馬子妻者。守屋妹也。雖有

皇子
皇子皇子

子相繼為大臣。及帝崩。守屋謀奉穴穗

皇女
皇女

部皇子為天皇。馬子奉皇太后。炊屋姬命

皇女
皇女

殺穴穗部皇子。尋殺守屋。崇峻即位。甚

皇女
皇女

惡。馬子驕恣。專權多設。兵仗於官中。馬

皇女
皇女

子聞之大懼。招聚其黨。潛謀弑逆。竊使

皇女
皇女

東漢駒行。弑馬子。凌德駒。贈遺豐厚。常

皇女
皇女

令出入卧內。駒密姦馬子女。河上娘。竊

皇女
皇女

匿為妻。既而事覺。馬子大怒。責而殺之。

皇女
皇女

推古朝。馬子弘專威福。嘗與皇太子奉

皇女
皇女

救撰舊事本紀。書未及成。太子聽馬子

皇女
皇女

續成之。三十四年。慧。於飛鳥河上。穿池築。因稱鳴大臣。

皇女
皇女

蘇我蝦夷。馬子推古三十四年。為大臣。

皇女
皇女

山背大兄王。各承遺詔。及葬皇嗣未定。

皇女
皇女

蝦夷欲獨決之。山背王察蝦夷意在田

皇女
皇女

村皇子。不救復爭。惟蝦夷叔父摩理勢

皇女
皇女

固欲山背王即位。蝦夷怒其違拒。遣兵

皇女
皇女

殺之。遂與群臣。翊戴田村皇子。是為舒

推古天皇
年表

亦見
誅

癸丑元年

蘇我入鹿 蝦夷子。一名鞍作。又稱林臣。為
過父。上下震恐。憚其嚴酷。蘇我氏嘗與
上宮諸王子有隙。入鹿將除之。而立
人大兄為天皇。二年。遣兵襲山背大兄
於班鳩。殺之。明年。入鹿雙起家於甘藷
岡。稱蝦夷家。曰官門。已家曰谷官門。稱
男女曰王子。宅外構柵。門傍作兵庫。每
門設水槽。各一木。鉤數十。以備火災。常
使力士持兵護衛。蝦夷又造家於求傍
山東。築城環池。起庫儲箭。每其出入。便
五十兵士繞身從之。天智帝雅惡之。遂
與藤原鎌足合謀。誅入鹿。使將
軍巨勢德大古伐蝦夷。誅之。

三

○都部

二

津守國夏 齊明帝五年。為遣唐副使。雖海
中遭風。遂入唐。與高宗問對。十
一月朔且冬至。高宗受
賀。吉祥列諸蕃之上。

一

津守國夏 攝津人。住吉祭主。右大辨吉祥
之裔也。元德中。敕營造住吉社。
授攝津守。正平七年。車駕還京師。至住
吉。御國夏宅。十有八日。因進為正三位。

二

○都部

三

調老人 其先百濟人。老人持統帝時。拜撰
善言司。後為大學頭卒。大室初贈
正五位上。追賞撰律
令功。賜其子功田。

四

調古麻呂 養老中。為明經第二博士。後
為皇太子學士。至正六位上。

五

孝子

六

綱引金村 備後葦田郡人。仁雲二年。詔
賜爵二級。復其田租終身。

七

義烈

八

調伊企難 為人勇烈。欽明帝時。副紀男麻
呂問新羅之罪。軍敗所執。伊企
難不屈。新羅王大怒。遂逼害。其子抱
父屍而死。其妻在虜中。悲痛作歌。

九

○奈部

十

朝臣

十一

難波根子武振熊 應神帝辛巳年。與武內
子藏之。仁德六十五年。
又奉敕誅飛彈宿禰。

十二

難波根子武振熊 應神帝辛巳年。與武內
子藏之。仁德六十五年。
又奉敕誅飛彈宿禰。

十三

難波根子武振熊 應神帝辛巳年。與武內
子藏之。仁德六十五年。
又奉敕誅飛彈宿禰。

十四

難波根子武振熊 應神帝辛巳年。與武內
子藏之。仁德六十五年。
又奉敕誅飛彈宿禰。

十五

難波根子武振熊 應神帝辛巳年。與武內
子藏之。仁德六十五年。
又奉敕誅飛彈宿禰。

十六

難波根子武振熊 應神帝辛巳年。與武內
子藏之。仁德六十五年。
又奉敕誅飛彈宿禰。

十七

難波根子武振熊 應神帝辛巳年。與武內
子藏之。仁德六十五年。
又奉敕誅飛彈宿禰。

十八

難波根子武振熊 應神帝辛巳年。與武內
子藏之。仁德六十五年。
又奉敕誅飛彈宿禰。

十九

難波根子武振熊 應神帝辛巳年。與武內
子藏之。仁德六十五年。
又奉敕誅飛彈宿禰。

二十

難波根子武振熊 應神帝辛巳年。與武內
子藏之。仁德六十五年。
又奉敕誅飛彈宿禰。

二十一

難波根子武振熊 應神帝辛巳年。與武內
子藏之。仁德六十五年。
又奉敕誅飛彈宿禰。

二十二

難波根子武振熊 應神帝辛巳年。與武內
子藏之。仁德六十五年。
又奉敕誅飛彈宿禰。

二十三

難波根子武振熊 應神帝辛巳年。與武內
子藏之。仁德六十五年。
又奉敕誅飛彈宿禰。

二十四

難波根子武振熊 應神帝辛巳年。與武內
子藏之。仁德六十五年。
又奉敕誅飛彈宿禰。

二十五

難波根子武振熊 應神帝辛巳年。與武內
子藏之。仁德六十五年。
又奉敕誅飛彈宿禰。

二十六

難波根子武振熊 應神帝辛巳年。與武內
子藏之。仁德六十五年。
又奉敕誅飛彈宿禰。

二十七

難波根子武振熊 應神帝辛巳年。與武內
子藏之。仁德六十五年。
又奉敕誅飛彈宿禰。

二十八

難波根子武振熊 應神帝辛巳年。與武內
子藏之。仁德六十五年。
又奉敕誅飛彈宿禰。

二十九

難波根子武振熊 應神帝辛巳年。與武內
子藏之。仁德六十五年。
又奉敕誅飛彈宿禰。

三十

難波根子武振熊 應神帝辛巳年。與武內
子藏之。仁德六十五年。
又奉敕誅飛彈宿禰。

三十一

難波根子武振熊 應神帝辛巳年。與武內
子藏之。仁德六十五年。
又奉敕誅飛彈宿禰。

三十二

難波根子武振熊 應神帝辛巳年。與武內
子藏之。仁德六十五年。
又奉敕誅飛彈宿禰。

三十三

難波根子武振熊 應神帝辛巳年。與武內
子藏之。仁德六十五年。
又奉敕誅飛彈宿禰。

三十四

難波根子武振熊 應神帝辛巳年。與武內
子藏之。仁德六十五年。
又奉敕誅飛彈宿禰。

三十五

難波根子武振熊 應神帝辛巳年。與武內
子藏之。仁德六十五年。
又奉敕誅飛彈宿禰。

三十六

難波根子武振熊 應神帝辛巳年。與武內
子藏之。仁德六十五年。
又奉敕誅飛彈宿禰。

三十七

難波根子武振熊 應神帝辛巳年。與武內
子藏之。仁德六十五年。
又奉敕誅飛彈宿禰。

三十八

難波根子武振熊 應神帝辛巳年。與武內
子藏之。仁德六十五年。
又奉敕誅飛彈宿禰。

三十九

難波根子武振熊 應神帝辛巳年。與武內
子藏之。仁德六十五年。
又奉敕誅飛彈宿禰。

本朝年代人物掌覽前編 上

皇極天皇
居六波羅守衛京
年表
二
三

長崎高重
高資之子。勇武絕倫。與諸將共拒義貞于武藏。晝夜力戰。被傷

凡三十餘人。遂至東勝寺。至則高時方行酒。與左右訣。高重徑入引飲者。三傳

而矢。中矢而死。

名越高家
遠江守朝時五世孫。遠江守貞家子也。高家為尾張守。元弘之

役。高時命高家及尊大等往京師。禦官軍。高家別將兵向山崎。與赤松則村戰

而死。

文學

猶原東人
右京人。該通九經。号为名儒。天平中。為駿河守。勝宝初。部内廬

原郡多胡浦濱出黃金。東人獻之。帝嘉焉。賜姓伊藤。志臣。宝字初進。正五位下。

孝子

奈良許知麻呂
大和添下郡人。稟性孝順。與人無怨。和銅七年。旌之。

中原章兼
父章房。為瀨尾兵衛太郎。所殺。章兼與章信日夜計復讎。遂執

孝德天皇
后妃
間人皇后
元妃阿倍
小足媛
把糠我乳
媛
皇子
有間皇子
年表
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

難波日香蚊
使主之諱。殺皇子。日香蚊抱皇子頭。二子各持一足。即皆自刎。眾為流深。雄略帝十四年。永日香蚊後。賜姓列女

難波部安良女
筑前人。不詳其祖先。年十六。適宗像大領秋足。秋足死。遠近婢之誓死。守節。詔免田租。

叛臣 附屬

中原兼光
信濃權守兼遠子。稱樋口二郎。事義仲。為之瓜牙。世稱木曾四天王。礪並之戰。兼光將兵自葦原襲擊平軍。斬敵將。歸自康。平軍退保藤原。兼光為魚鱗陳。直衝富山。重能之陣。殺敵二百餘。自亡百騎。兩軍相退。及行家背義仲。據石川。拔率兵攻而拔之。獲首虜一百級。行家挺身而走。追至紀伊。既而聞義仲軍不利。放俘斂兵。急還京師。遂降。初法住寺之乱。兼光縱兵多辱公卿官人。以故被斬于獄。

戊申按台
雉恐當罪
白鳳大織
冠公傳以
白雉五年
作白鳳五
年以天智

四五

帝三年作
自風十四
年也蓋
天智帝崩
尋及十甲
之役年号
不修至天
武帝即位
更治舊跡
以自鳳紀
年已能襲
舊偽之事
戊申實有
說

中原兼平守領今井四郎兼光弟及燧城不
般若野接戰自且至昏大敗之斬二千
餘人義仲犯法住寺殿兼平率兵由尾
坂追放火宮殿自射殺清原近業東兵
來討與源義弘拒之勢多撤橋守之聞
宇治既破敵入京師師殘兵而還遇義
仲於粟津原散兵稍集又與東兵大戰
義仲兵死傷殆盡兼平勸義仲自裁單
騎遮追兵既而聞義仲死遂衝刀而死

○武部

朝臣

村市泰田來津齊明七年與狹井損擲率
兵護送百濟王子豐璋是

歲新羅與唐軍來圍列柔我軍救
之大敗田來津手殺數十人而死

村國男依壬申之乱帝大友敗走自縊男
依獲其首詣不破宮獻之四年

將軍

宗尊親王後嵯峨帝庶長子也寬元二年
為親王以母賤不得為儲貳帝

意矜之建長四年加冠鳥羽殿叙三品
北條時賴廢征夷大將軍藤原賴嗣請
迎宗尊親職上皇大悅許之詔為征夷
大將軍及至時賴政造府第崇奉頗超

齊明天皇
年表
乙卯元年

一
二
三
四
五
六
七

戊申按據
大織冠公
傳則乙卯
是自鳳六
年也耳

曰主文永三年僧正良基法印嚴慧等
素常娛侍宗尊竊與其黨謀弒北條氏
宗尊不之知至是事漏良基入高野山
絕食而死嚴慧亡命政村時宗乃廢宗
尊逐還京師處六波羅北方立其子惟
康九年薙髮號行證十一年薨年三十
三宗尊善倭歌以藤原為家
為師所著有瓊玉集十卷

義烈

村上義光稱彦四郎為左馬權頭元弘之
亂與子義隆等從護良親王至

吉野築城守之賊以大兵來攻外城已
陷義光狂為護良自刃乃割腹抽腸以
投于壁而斃賊四
集就斬其首解去

村上義隆義光子稱彦五郎為兵衛佐藏
人義隆欲與父偕死義光曰函

去為王拒後勿徒死義隆悲訣既而吉
野執行岩菊丸將兵追及護良義隆單
身留闕斬數卒躬蒙二十創入傷竹叢
潰腹死護良終護免義隆年十八矣

列女

紫式部越前守藤原為時女也資性敏慧
幼時聞人讀書輒能諳記為時甚

愛之常撫之曰恨不使汝為男長而能
和歌博涉和漢白記兼通朝廷典故嫁

帝大友
后妃

妃十市皇
女

藤原生面
刀自

皇子
葛野皇子

與多王
皇女

壹志姬王
主表

白鳳元年
夏五月大

海人皇子
友大友王

子禮兵討
之不克秋

七月大友
王之師敗

精于勢多
王子崩于

山前二年
春正月大

海人皇子
自立

桃井直常逆擊于利根川。
氏綱力戰敗之。建德元年卒。

宇都宮泰藤 建武中。足利尊氏犯京。泰藤
從。賜屋義助。拒敵于山崎。不利。遂與諸
將。俱扈蹕保延。暨寺。及車駕還。闕泰藤
從。新田義貞。奉皇太子。北走。

瓜生保 建武二年。保與本國人諸族。應官
軍。討名越時兼有功。延元元年。義貞奉
太子。恒良。抵于金碕。義助。義頭。先趣保
之。山山城。亡。何尊氏。進帝。作討義貞。族
之。詔。乃令其將高經。貽保誘之。保以為
帝意實然。遂據城拒義助。從高經。及高
師泰。田金碕。既而聞義繼。與重照。謀為
義治。揚兵。還于山。與諸弟。協謀。擁義
治。為將。揚旗於飽和祠前。明年。援金碕。
保。義繼。姪七郎。與
里見時成。俱戰沒。

宇治惟直 稱八郎。肥後人也。世為阿蘇大
官。司。從菊池武俊。拒尊氏。蒙重
創。自
殺死。

將軍家臣

上杉憲顯 房始食丹波上杉莊。因氏。憲顯

天武天皇

后妃

應野皇后
妃大田皇

女

妃大江皇
女

妃新田部
皇女

夫人藤原
水上娘

夫人藤原
五百重娘

夫人藤原
未公孫我

石川大難
娘

額田姬王
駒方尾子

娘
宋人殺我

皇太子
岡宮天皇

草壁
大津皇子

崇道蓋敬
皇弟舍人

長親王

為民部太輔。與養兄重能。從足利直義。
拒官軍于手越河原。遂從尊氏。取京師。
後與細川和氏。細川賴春等。同至鎌倉。
輔義詮。源頭家發兵來擊。憲顯等拒之。
不利。擁義詮。出走。招發兵。追至青野原。
與高師冬並。為其執事。授上野等四國
守護。及直義。順命。與養子能頭合。進至
武藏。欲誅高師直兄弟。師冬挾基氏來
擊。於路。軍變。師冬敗死。明年。憲顯入京。
師。從直義。北走。轉至鎌倉。尊氏親來擊。
敗直義于陸垂嶺。憲顯走于信濃。會義
宗。據苗吹嶺。憲顯率兵出屬之。從與尊
氏戰。戰不利。復還言農。時帝出御男山。
憲顯奉詔。從義宗。入援。路聞男山已陷。
而還。基氏宥其罪。再授以越後守護。芳
賀禪可發兵。攻憲顯。無幾。基氏遂徵憲
顯。為執事。禪賀復出兵。要之。基氏親擊
禪。可滅之。基氏死。其子氏滿。為管領。憲
顯。卒。時年六十一。法名桂巖。道昌。稱。清

上杉重能 本姓宮津氏。憲房之甥也。父曰
道充。重能如為憲房所子。養任

伊豆守。尊氏聞朝廷遣義貞討已。奔入
建長寺。將薙髮。重能密與直義謀。矯作

討尊氏詔書。以激成其拒計。遂從尊氏。
入京師。將兵拒官軍。不利。乃從尊氏。西

本朝年代人物掌覽前編 (上)

走尊氏再入京師據東寺將出戰重能諫而止之後與畠山直宗共被流於越前師直潛使八木光勝誘殺能。

歌人

卜部兼好 神祇大副兼茂曾孫也。居吉田。兼好幼而聰悟好誦老莊之書。有文才善和歌兼工書。仕後宇多帝。任左兵衛尉。稍被親昵。帝崩兼好剔髮入修學院。以靜退自居焉。當時公卿大夫皆愛敬其為人。與之遊者甚多。然兼好嘗為尊氏執事師直代作書挑高負妻論者以此頗少焉。所著集有徒然草。

孝子

君子尺府呂 相模足上郡人也。靈龜元年表其孝行。

列女

瓜生保母 逸其姓名。及保義鑑與里見時成俱戰死。号哭滿衙。唯保母神色自若。无敢戚容。進謁義治曰。兒曹不力。使里見君戰沒。竊恐大傷。郎君之心也。幸二子從死。足以少謝。妾家兒曹本為郎君起大事。苟使賊平。亡百子子姪。固非所悔。三子猶在。再舉可期。是妾所以轉哀為喜也。因親起為義治行酒。士

德積親王 高市皇子 子道祖王 新田部親 忍壁親王 磯城皇子 皇女 太伯內親 但馬內親 王 紀皇女 田形內親 泊瀬部內親 親王 託基內親 王 圭表 白鳳二年 八七六五四三二

衆感激皆自思奮。

○乃部

朝臣

野見宿禰 出雲人。天穗日命十四世孫也。以勇力聞。垂仁朝命與當麻蹶速角力。蹶速骨折而斃矣。三十二年賜陶地任土部職。改姓土部臣。

○於部

朝臣

太田田根子 崇神七年。布告天下訪求。以祭主。致祭大物主神。

大磐 紀小弓子。為人驍勇豪放。父計至直。赴新羅。却諸將專軍政。據任那。通高山城。及兵竭力屈。走飯時頭宗三年也。

大伴室屋連 天忍日命之裔。而道臣命七世孫也。父武以雄略即位。室屋為大連。及帝崩受遺詔。補佐皇太子。討屋川皇子平之。上置於皇太子。

大伴金村 室屋孫。任仁德。仁德崩。武烈未即位。大臣平群真鳥陰圖不軌。

其子賴適得罪於武烈。金村奉命誅真鳥父子。奉帝即位。帝崩迎。倭彥王為帝。

九 十 十一 十二 十三 十四 朱鳥元年

本朝年代人物掌覽前編

持統天皇
年表

大伴狹手彦

室屋曾孫。仕宣化朝。二年。父金村承詔。遣狹手彦。援任那。

丁亥元年

大伴吹負

子也。憤將發。肥前。其妾松浦佐用媛。借別登高山。脫領巾。麾之。其山曰。領巾麾嶺。

三

大分雅見

以勇敢稱。士申之役。與會。三。大分雅見。瀨田先鋒。七年卒。

四

大伴友國

士申之役。從大武于東國。持統六年卒。

五

多品治

為美濃安八磨郡湯沐邑令。士申之役有功。

六

大伴安麻呂

右大臣長德第六子也。士申亂。從大伴吹負有功。至大納言兼大將軍和銅七年薨。祿佐保大納言。

七

大伴繼人

左大辨古麻呂子也。寶龜八年。如唐。九年還。惡風破船。舳舻各分。繼人與藤原清河女喜娘等乘其舳。著肥後天草郡。後以事被誅。

八

大伴御行

大連金村玄孫。右大臣長德子也。士申之亂。從天武帝有功。大寶元年。薨。年五十六。帝甚憐惜。為罷大射。贈正廣貳。贈官之典。是為始。

十九八七六五四三二

文武天皇
后妃

大伴古麻呂

道臣命之后也。勝寶二年。為遣唐副使。六年。飯自唐。應對稱旨。轉左大辨。至正四位下。寶字初。黨橘奈良麻呂。事露鞫問投死。

藤原皇后
續紀電門

大伴清麻呂

本姓中臣。祭主。可多能祓呂。清麻呂。歷事數朝。在官視事。老而匪懈。延曆七年。薨。年八十七。

子孫
年表

大中臣正棟

清麻呂孫。父知治。麻呂。正棟。幼而警悟。孝順。天至。就學。以幹敏稱。素有出塵之志。遂為僧。改名壹演。貞觀中。羅疾。駕船而逝。謚慈濟。

丁酉元年

大中臣國雄

清麻呂玄孫。幼而聰明。起。越該通。遂通九經。三史。老莊等書。隨和而應。舉秀才。為文章得業生。至神祇大副。

大寶元年

大伴旅人

右大臣長德孫。大納言安麻呂長子也。和銅中。為征隼人持節。大將軍討平之。天平三年。薨。年六十七。旅人有文藻。善和歌。性愛酒。作贊酒歌。

應靈元年

大伴家持

旅人子。延曆元年。坐冰上川。繼位。家持善和歌。撰萬葉集二十卷。

四

大野東人

御史大夫果安子也。養老中。從一年。為大將軍持節。討藤原廣繼。斬之。以功叙從三位。十四年。薨。

三

大野東人

御史大夫果安子也。養老中。從一年。為大將軍持節。討藤原廣繼。斬之。以功叙從三位。十四年。薨。

五十

元明天皇
和朝元年
年表

七 六 五 四 三 二

大伴駿河麻呂 寶字初坐黨橘奈良麻呂被謫召還寶龜中為陸奧

按察使兼鎌守將軍
七年卒贈從二位

大伴益立 寶字中為軍監有功寶龜六年為遣唐副使遂不行十一年為

征東副使兼陸奧守以事削其本位

大伴弟麻呂 吹負曾孫父古慈斐延曆十三年為征夷大使赴陸奧十三

年賜節刀討蝦夷大敗之
大同四年薨年七十九

大江匡房 大學頭奉用孫信濃權守成衛子也穎悟絕倫四歲始讀書八

歲通史漢十一歲作詩推大納言源師房命賦雪裏春松負詩匡房援筆立成

師房奇之進呈後冷泉帝大感賞賜等料補文章得業生對策及第負才憤世

欲海迹山林嘉保元年為權中納言并德中兼太宰權師和南而歸嘉承中再

為權師足疾不赴任天永二年兼大藏卿無幾以病祝髮薨年七十一世稱江

師自晁祖參議音人八世相繼傳業為三朝帝師及薨人咸惜焉博識彊記淹

練朝典著江家次第二十一卷晉紳取為摸楷最以詩文名于世兼工和歌匡

房家多書累世不罹災作庫于二條高倉藏之或曰京師多火何不之思匡房

元正天皇
年表

七 六 五 四 三 二

日我家文章當關朝家盛表何慮之有仁平中文庫遭火朝廷亦表

大庭景親 稱三郎景義弟也源賴朝據石橋山景親及弟景久與諸將三

千騎往攻賴朝敗走入摺山遣騎報狀平清盛清盛大駭命惟盛忠度等將兵

擊賴朝既而賴朝聲勢大振欲逆擊平氏景親逃于河村山數日出降平

大庭景久 稱股野五郎與景親攻賴朝于石橋山景久欲擊武田一條等

與安田義定工藤景光等戰潰奔及景親被斬潛赴京師遂從平惟盛擊源義

仲于北國戰死

大江親廣 大膳大夫廣元子也源實朝被殺追悼不已薙髮法名蓮阿與

藤原光季為京畿守護應上皇詔與藤原秀康中條盛綱拒東軍兵敗遁去

大內惟信 修理大夫惟義子也上皇討藤原光季惟信與諸將誅之與糟

屋有久等守大炊渡官軍不利惟信敗走窟匿比叡山為僧改名成願寬喜二

年發覺索捕處流

大館氏明 祖家氏乃新田政義之次子也父宗氏氏明與兄幸氏從源顯

家入援延曆寺攻佐々木氏賴觀音寺城拔之遂進攻拔園城寺尊氏西奔義

本朝年代人物掌覽前編 上

聖武天皇

后妃

藤原皇太后

夫人藤原

養廉乃自

夫人藤原

氏

夫人廣嗣

古那可知

皇子

皇太子某

宏積親王

皇女

井內親

王

稱德孝謙

皇帝

不破內親

王

年表

神龜元年

二

三

四

五

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

十八

十九

二十

自會嬰疾遣氏明及江田行義先發破赤松則村軍勢大振後與行義歸于尊氏及帝南幸吉野氏明竊逃詣行宮為伊豫守護到任與土居得能氏合勢攻略据世田城自盡

大井田氏經 新田義重之裔也祖經隆父經兼元弘初氏經與父祖共

從新田義重討高時有功及尊氏及又從戰官根又與諸將護駕保延曆寺亡

何尊氏西走義重奉詔討之而西方悉為敵官軍久無功會兒鳴高德舉兵熊

山義重乃遣弟賜屋義助及氏經等諸將應之後從義重北行卒越後

太田守延 稱三郎左衛門但馬人也元弘中高時遷皇子經尊於祖馬守

延時為守護與源忠顯推經尊為上將與俱攻六波羅戰敗死之

將軍家臣

大庭景能 姓平氏鎌倉權五郎景政之裔也世居相摸景能稱大庭平太

又德鳴權守父曰景親屬源義朝攻白河殿為朝射中景能膝墜馬及賴朝起

兵與弟豐田次郎景俊歸于賴朝從軍石橋文治五年賴朝請擊藤原泰衡朝

議不決賴朝召景能而咨議不俟天裁而行誅戮建久中以表老祝髮尋得罪

見逐承元四年卒

大江廣元 中納言匡房曾孫式部大輔維光子也家世業儒多聞人頗涉

文史有籌略賴朝起義往從之元曆元年始置公文所廣元為別當緣理政事

賴朝與叔父行家弟義經有隙文治元年奏讀朝廷捕之不能獲從廣元議奏

請分遣將士置國莊園兵馬之權終歸賴朝朝廷表徵自此始矣以功賜肥

後山本莊時關西承平之後武士橫恣誅求百姓或稱地頭奪寺社邑戶廣

允允院宣繩檢澄汰凡幕府每有重事所合奏請舍命往來皆被允可素諳朝

章練達政事賴朝得振武威号令天下者廣元三善康信等功居多累叙正四位下

阿嘉祿元年卒年七十八

大江季光 廣元子為左近衛將監補藏人叙從五位下實朝薨薨髮名西

阿承久三年從北條泰時犯京師尾張川之戰別攻鶴沼破之泰時進逼京師

與三浦義村攻淀芋洗破之後為評定衆三浦泰村之誅也從妻言出援同三浦氏自殺

大友貞宗 豐後人也五世祖能直其母大友氏侍源賴朝得寵有身出嫁

本朝年代人抄學覽前編

孝謙天皇

年表

天平元年

二

三

四

五

六

七

八

天

字

元

年

藤原親能親能生能直能直因冒母姓大友氏授豐前豐後守護父親時貞宗襲守護薙髮号具簡元弘中帝在船上自宗與菊地武昭少貳負經竊納歛既而願望及官軍克六波羅又與貞經合謀延元元年尊氏犯京師求接於貞宗自宗應之會尊氏敗退于湊川貞宗勸尊氏赴于筑紫菊地武俊迎戰于多多良濱自宗復從直義攻拔福山城進戰湊川遂大敗正成尋與諸將拒義貞於東寺却之卒

大友負載

貞宗子為左近衛將監從義貞討尊氏於鎌倉路潛送款尊氏竹下之戰乃降尊氏反擊敗官軍明年為結城親光所斬重創而卒

大友氏泰

貞宗子從脇屋義分拒尊氏敗績因降尊氏尊氏命紹負載後授以源姓及直義奔肥後氏泰屬之後再降尊氏

大内義弘

孫太郎周防人也其先出自百濟王余璋義弘左京權大夫襲守護義滿加豐前守護義弘年甫十六與探題今川貞世畧九州二十年間大小二十余戰遂致平底山名氏清之叛義滿也義弘拒戰多功義滿又授以和泉紀伊守護應永四年義滿命義弘討少貳菊池等平之後薙髮号百繫六

廢帝
后妃
官人栗田
諸妙
年表
天平三年

八七六五四

年率兵叛義滿戰死界浦初元中之末義弘說吉野講和議成神器入京皇統歸一由其力焉

文學

太安万侶

和銅中奉勅撰古事記靈龜初進從四位下為氏長尋為民部卿養老七年七月卒

越智廣江

養老中為明經第一博士詔每退朝侍東宮至從五位下刑部少輔兼大學博士

大藏善行

以文學著貞觀十七年蒙勅侍藏人所授定御書又講顏氏家訓教授左右年少於禁中元慶七年為存問渤海客使兼領客仗寬平中叙從五位為勘解由次官兼參河權介大外記如故善行學究經籍善于教道生徒甚多時平及第仲平等皆受業嘗與時平奉勅修三代錄

大江音人

左京人父本主音人受業菅原是善博學善屬文天長末補文章生承和中舉秀才任備中目數年坐事謫尾張居之三年徵歸京自觀中任參議八年奏請改姓大枝為大江尋轉左大弁叙從三位十七年帝讀史記音

五三

神德天皇

神護元年

神護元年

景雲元年

人為待詔。元慶元年。敕議上皇送皇帝書。可注神諱否。音人奏議。唯注神諱之一字。從之。是後。薨年六十七。嘗奉敕撰弘帝範三卷。群籍要覽四十卷。又與菅原是善。撰定負觀格式。其上表及式序。皆音人之所作也。

大江朝綱

音人孫。父曰玉淵。繼父祖業。該博宏瞻。詞藻典麗。夙學文章。生對策登科。村上朝奉。敕撰新國史四十卷。嘗餞渤海使裴瑋。傳譽異域。善書與道風。論筆法。互爭優劣。歷左右中大辨。任參議。世稱音人曰江相公。朝綱曰後江相公。

大江維時

千古第三子也。夙學文章。生策試擢秀才。兼平中。始講文選於北曹。天慶四年。進中納言。為人博聞強記。淹貫經史。凡遷都以來。第宅變遷。人物死亡年月。皆能諳記。朱雀村上冷泉。圓融四帝御諫。皆其所撰。進人以爲榮。應和三年。薨。年七十六。詔贈從二位。世稱江納言。

大江以言

千古孫。大隅守仲宜子也。以言初冒姓弓削。後復大江。少而受業。藤原篤茂。以春秋對策登第。長保寬弘間。任文章博士。兼式部大輔。飛彈權守。至從四位下。寬弘七年卒。年五十六。其雄文麗句。得世者多。當時與紀齊名。

光仁天皇

后妃

高野中宮

夫人藤原

曹子

尾張女王

縣金養男

耳

鳴姬

皇子

崇道天皇

早良

御田親王

廢太子他

戶

廣根諸藤

僧開成

皇女

能登內親

王

酒入內親

王

彌努摩內

親王

年表

寶龜元年

二

大江匡衡

重光子也。爲人長身鷹肩。七歲始讀書。九歲賦詩。受學于祖維時。及長。博洽當時名儒。無能及者。略解織緯。兼能和歌。天延中。舉文章得業生。補秀才。天元二年。對策尋蒙使宣。永觀永祚間。累遷文章博士。侍帝讀書。寬弘二年。敦康親王始讀書。匡衡又爲侍讀。長和元年卒。年六十一。有集行于世。匡衡位不稱才。任途沉滯。屢有所請。而不能得。每歎其轍軻。

大江定基

齊光子也。夙繼家業。善詩文。天名中。以父祖功。勞擢補藏人。尋任參河守。初得赤坂。媚力壽。置之。遂爲妻。而其婦力壽病死。定基抱屍号哭。不斂。葬者數月。永延二年。遂下髮爲僧。投如意輪寺。師事僧寂心。改名寂昭。又就延曆寺僧源信。講道。長保四年。遂如宋。宋主延見。問本朝事。寂昭請紙筆對焉。賜号圓通大師。長元七年卒。于宋。

大江時棟

匡衡養子也。不詳何人子。幼而穎敏。有重瞳子。攝政道長。路見一童子。行且讀書。儀相不凡。心奇之。取而歸家。令匡衡子養之。才學日進。博通經史。長德三年。省試。獻詩。紀齊名。評不當。匡衡引古今駁之。時棟遂得及第。時

棟精養生術奉試
凡二仕至國守

歌人

凡河内躬恒 天津彦根命之裔也。家本寒微。善和歌。與貫之忠岑等並稱。醍醐帝召之。候御書所。延喜中。候御厨子所。歷遷和泉大掾。授六位。與撰古。今和歌集。延喜七年。死。年四十九。

大中臣能宣 祭主賴基子也。世善和歌。至能宣最著稱。初候藏人所。天曆中。以勞為讚岐權掾。與訓讀萬葉和歌集於昭陽舍。又與撰後撰和歌集。天祿初。為祭主。累進正四位。下。正曆五年卒。年七十一。

大中臣輔親 能宣子。字中槐。繼父為祭主。任神祇伯。長元七年。使于伊勢。時寶殿松樹間有光耀。輔親探得。碧珠。還而獻之。帝特賞授從三位。九年。叙正三位。長曆二年。使于伊勢。病薨于途。年八十五。輔親工和歌。其家有泉石之勝。以象海橋立。特高其屋簷。以便觀月焉。世稱其雅致。

孝子

凡部明麻呂 讚岐三野郡人。外從八位上。已西成子也。年十八入仕京。師積勞任本郡大領。請讓其父。自守子職。孝養備盡。嘉承元年。敕叙三階免租。

義烈

大河次郎兼任 陸奥押領使藤原泰衡將也。泰衡滅後。肅聚餘黨。衆精至一萬。賴朝遣義兼常胤將兵擊之。兼任連敗。挺身走栗原寺。為村人所殺。

方技

大津首 初為僧名義注。慶雲中。隨美努淨麻呂。往新羅而學。踰年而歸。和銅中。以善占還俗。賜今名。為陰陽頭兼皇。后宮亮。天平初。詔教授弟子。卒。年六十六。

大津大浦 亦習陰陽。惠美仲麻呂甚愛信。天平寶字末。仲麻呂謀不軌。問大浦吉凶。大浦恐禍及已。密告其狀。未幾。仲麻呂反。褒授從四位上。為左兵衛。佐兼美作守。神護初。賜功田。坐事左遷。日向員外。為奪位封。寶龜初。召還復姓。位。為陰陽頭兼安藝守。六年卒於官。

興世書主 宜孫。父曰古麻呂。為人恭謹。善修容儀。善和琴。因為大歌所別當。時新羅人沙良真熊者。善新羅琴。書主從而受習。遂窺其伎。出為和泉守。有政績。遷備前守。亦以清平稱。永和中。表請改姓。因賜姓興世朝臣。至從四位下。

桓武天皇 后妃 藤原皇太后 藤原皇后 親王 夫人藤原 吉子 夫人多治 比真宗 夫人藤原 小原 女御紀乙 魚 女御貞清 教法 女御貞清 永繼 橋當子 橋御井子 坂上春子 紀若子 坂上文子 藤原上子 藤原河子 河上好 百濟教仁 百濟員香

藤原東子 治部大輔嘉祥三年卒年七十三

藤原南子 中臣豐子

橋田村子 多治比豐

繼 皇子

葛原親王 皇子

伊予親王 皇子

萬多親王 皇子

智陽親王 皇子

子忠貞 皇子

明日香親王 皇子

佐味親王 皇子

大德親王 皇子

仲野親王 皇子

葛井親王 皇子

大田親王 皇子

坂本親王 皇子

長岡親成 皇子

良峯安世 皇子

子木蓮 皇子

宗貞 皇子

皇女 皇子

高志內親 皇子

朝原內親 皇子

久部

朝臣

樟盤手 壬申之亂手殺吉備國司栗隈王

難波皇子也。天智四年拜筑紫師。壬申之亂。帝大友使佐伯男發筑紫兵。王受

箭不敢發。兵。天武三年。內藏全成。寶字中。年拜兵政官長。四年。為迎人。

唐大使判官赴唐。天應元年。為征東副使。陸奧守征蝦夷。至從四位下。

百濟敬福 百濟義慈王之玄孫也。敬福為人。惠并有從政之才。聖武帝殊

寵遇之。而放縱不羈。不矜細行。頻歷外任。授從三位。神護二年。薨。年六十九。

國中公麻呂 其先百濟人也。以所居村名。銅像。規模廣大。冶工不能措手。公麻呂頗有巧思。意成之。寶龜五年卒。

百濟俊哲 寶龜中。蝦夷作亂。俊哲有功。天應元年。賞征夷之勞。賜正五位。上勳四等。延曆中。坐事。左降日向。權介。赦還。為征夷副使。十四年卒。

楠正成 河內人。左大臣楠諸兄之裔也。世居金剛山西。舍多楠樹。因以為氏。

因幡內親 王

安濃內親 王

大宰內親 王

甘南美內親 王

親王 王

滋野內親 王

伊香內親 王

春日內親 王

高津內親 王

賀集內親 王

菅原內親 王

安教內親 王

大井內親 王

紀內親王 王

善原內親 王

楠正行 正成子。叙正四位下。為帶刀檢非違使。左衛門尉。兼河內守。後醍醐

父正康。母某氏。禱志貴山。生正成。山神毘沙門也。以故。小字曰多門。元弘元年。

駿河内親

王

池内親

王

延曆元年

生表

二

三

四

五

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

十八

十九

二十

二十一

二十二

二十三

帝出花山院御内山。正行與從弟和田
正朝等來赴之。帝崩。入宿衛。後村上帝
踐祚之初。屢出兵住吉側。以挑敵軍。正
平三年。足利尊氏遣將細川顯氏以兵
三千來攻。顯氏大敗。直奔保天王寺山
名時氏。以兵六千授顯氏。屯于住吉。正
行大戰。破時氏于瓜生野。明年。正行進
逼京畿。尊氏憂恐。乃令高師直及弟師
泰發兵八万來攻。正行與弟正時。和田
正朝等。詣行宮奏請。詣後醍醐帝廟。恭
謝而後發。軍遂敗績。正行與正時。交刺
而斃。年廿。宗族凡廿。從兵九百。戰歿三

將軍 附屬

公曉 幼名善哉。賴家子。賴家之被殺也。年
四歲。政子收恤之。命實朝養為子。剃
髮為僧。入園城寺。從明王院僧正公胤
受業。補雀岡別當。公曉常憤父之廢黜
遭害。欲殺實朝。義時。季。冤魂。承久元年。
實朝為右大臣。拜賀鶴岡社。禮畢。實朝
揖隨從廷臣。將下石階。公曉匿其側。躍
出。斬之。從者為其黨所擊。死。義時宣政
子命。使三浦義村殺之。義村乃選長尾
定景。與壯士五人。行。遂斬公曉。送首。義
時。時年十九。

將軍家臣

二四

工藤景光

茂光宗人也。賴朝既敗。匿於稻
山。股野景久欲遮走路。景光與
安田義定俱戰。而破景久。建久中。賴朝
大獵于富士野。景光時為射手。選首。年
已七旬。余。臨獵場。有鹿挺走。三發皆不
中。嘆曰。是豈山神所取乎。我命盡於此
及昏果
病作。

工藤行光

稱小二郎。景光子。奧州之役。與
父景光策祐光等七人。夜潛踰
阿津賀志山。薄西木戶。獲泰衡猛士伴
藤八首。奧州悉平。賴朝賞功。以岩井郡
賜之。行光有膂力。殆兼數十人。
行光有三壯士。賴家受其勇壯。

熊谷直實

稱二郎。平負盛後也。父二郎大
熊谷直實。夫直負居武藏。殺洲之大里郡
熊谷鄉。巨熊。以熊谷為氏。直實幼矢所
怙。與兄直正。育於姨夫久下直光家。直
實慷慨剛直。嘗代直光直。大番。等輩以
代人輕侮之。真實不堪。抑屋。不請直光
而仕。中納言平知盛。賴朝起兵。直實與
諸黨大庭景親。攻之後。降從賴朝。攻佐
竹秀義。直實與平山李重等。赴之。先登
斬獲。其功居多。元曆元年。從義經。攻義
仲。軍至守治。敵撤橋板。李重應暴。先登
橋架。直實亦趣之。子直家。年十六。繼父
而進。直實故矢登。義仲兵。藤太兼助。又
一谷之役。直實父子欲果。先登。冒夜進

平城天皇
后妃
藤原皇后
妃朝原内親王
親王
妃大宅内親王
尚侍藤原
系子
伊勢繼子
葛井藤原
紀貞貞
皇子
阿保親王
皇子某
廢太子高
岳
巨勢親王
皇女
上毛野内親王
親王
獻努内親王
石上内親王
大原内親王
王
羊表

逼城門。繼季重入而戰。城遂陷。平族逃于海。直實追及斬平敦盛。賴朝流鏑馬於鶴岡。命直實樹的。直實不從。賴朝怒。削其采地。建久三年。以事遂走京師。投鎌倉謁賴朝。承久二年。九月十四日。沒。直實豫知死期。報之直家。直家奔赴見之。果如其言。嘗被賴朝下文。稱曰。日本剛者。

工藤某

稱新左衛門。每以高時急政。時爭山。為僧。誓不復出。及鎌倉滅。往弟其處。府第兵纏。望茂艸而已。乃作歌而去。

楠正儀

正成子。正行次弟也。歷任至參議。高師泰築墨石川。攻田富山。國清尋代之。正儀始終固守。國清從真義。滯順。正平七年。義詮送欵。帝親御軍。宣言幸京師。軍欲襲義詮。行次往吉源頭。能將兵自丹波路進。正儀與和田正忠等率兵夜渡桂川。與細川顯氏戰。敗之。細川賴春踵至。正儀擊斬賴春。義詮走。近江車駕駐蹕男山。義詮以大衆來迫。王師敗績。義詮復陷京師。七年。擊敵渡邊。敗之。十四年。義詮統國清等諸將。犯天野行宮。正儀遂入金剛山。義詮狀兵而歸。十六年。正儀攻佐々木秀詮。弟氏詮於根

大同元年

四三二

津破之。追斬秀詮。氏詮是歲。細川清氏降。帝遂命正儀與清氏俱進攻京師。官軍復京師。明年。官軍奪京。南歸。不幾。清氏戰沒。王師始燼。正儀拔淨光寺。若攻赤松光範。遂退。二十四年。叛降義滿。天授四年三月卒。正儀為人遲重。好謀。誠信。接物。其行兵。溢敵。先謀後戰。故多不至敗。而於決機。應變。又其所短也。

文學

百濟倭麻呂

其先百濟人。慶雲中。奉試對策。叙正六位上。為但馬守。卒。年五十六。

列女

楠正成妻

不知何氏女也。拒辱氏于兵庫。遣還于河內。且誠以保金剛山事。授以所賜黃金。作刀泣訣。正成戰歿。湊川。尊氏致其首于河內。正行悼甚。起請佛龕。拔正成所授刀。將自殺。母趨抱之。曰。汝面奉遺言。還以告吾。而言猶在耳底。然如弗記。吾恐汝背國事也。正行愧止。

方技

百濟河成

本姓余。其先百濟人。長於武藝。能挽強弓。兼善圖畫。大同中。為

嵯峨天皇
后妃
橘皇后
妃高津内親王
親王
如多治比高子
夫人藤原高子
彦子
夫人藤原緒夏
女御大原淨子
女御百濟貴命
衣更山田近子
更衣飯高室眉
前侍百濟慶命
笠繼子
秋條高子
大原全子
高階阿子
交野女王
文室文子
廣井氏

也部

朝臣

山背部小田 壬申之役從天武於東國。文武二年卒。

山上憶良 大宝初為遣唐少錄。逾年而飯聖武朝為筑前守。憶良屬文善。倭歌著歌林類聚。

山田古嗣 左京人。父益人。古嗣天性篤孝。謙寡言。公卿有異議。每諮詢焉。古嗣推薦文士。多見舉用。仁壽中。任相模權介。卒于官。年五十六。

山杉王 久米皇子之后也。惠美仲麻呂反有功。授從三位。及帝被廢。將兵田中官院。宣上皇詔。神護初。賜勳二等。景雲元年薨。年四十六。

山田春城 字連城。右京人。年十五入學。應春城性甚寬裕。而議論功直。無所阿避。不事細藝。不懼咎崇。卓有儒者氣象。

山田重忠 鎮守府將軍源滿政後。泉太郎重滿子也。稱三郎。世家于美濃。

上毛野氏
安倍楊津
田中氏
栗田氏
惟良氏
長岡氏
布勢氏
當麻氏
紀氏
內藏氏
甘南倫氏
皇子
業良親王
秀良親王
基良親王
忠良親王
淳王
源信
源弘
源常
源寬
源明
源定
源融
源勒
源鎮
源生
源安

北條氏之討也。重忠應詔與藤原秀澄守洲股。東兵破。大吹渡。諸將望風崩潰。重忠獨率九十餘騎。留河岸。與北條泰時戰。官軍防守治勢多。重忠又赴勢多。撒橋板固守力戰。遂入嵯峨山自裁。

將軍家族 附屬

安田義定 刑部丞源義光孫。而義清子也。源賴朝之起兵也。義定與工藤景光等赴援。道遇股野景久等率兵來攻。義定邀擊走之。賴朝令義定守遠江。防平氏。壽永二年。叙從五位下。為遠江守。明年。屬源義經。攻一谷。獲平經正。平師盛首。建久中。賴朝聞謀及殺之。

安田義遠 義定弟。稱淺利與一。壇浦之戰。乏義遠乃注矢。射洞新宮。紀四郎親清胸。而尚過海。五段許。舉軍大駭。建仁中。請賴家納城資。盛姑坂額為妻。

將軍家臣

八田知家 源義朝庶子。字都宮。宗綱。遂養為子。冒姓藤原。居下野。八田。因氏焉。後食常陸小田。又稱小田氏。後白河上皇直武者所。任右馬允。左衛門尉。

源澄 兼筑前守及賴朝起知家往歸之從範
源清 賴義經擊平氏於西海文治中賴朝征
源啓 藤原泰衡以知家別為將有戰功及泰
源繼 衡亡虜其叔父樋瓜俊衡賴朝獵富士
源勝 野濳多氣義幹遂坐罪賴家立知
源賢 家參決政事後薙髮号尊念卒

皇女 山名時氏 八世祖伊豆守義範始氏山名也

正子內親 父政氏時氏為左京權大夫元弘中與

俊子內親 從政氏俱從尊氏戰竹下又從走筑紫又

雙子內親 侍所別當因備伯耆守護六年從尊氏

芳子內親 降高山寺城正平二年戰瓜生野大敗

基子內親 身被七創尋與師義起兵攻佐々木高

宗子內親 氏明年時氏與師義將兵與藤原隆俊

有智子內親 捕正儀並向京師義詮陣東山時氏攻

親王 大敗之義詮東走又破高師詮軍于吉

仁子內親 峯尋引還伯耆奏奉直冬為大將九年

紀子內親 督諸軍進山門兵望風來附高經直常

齊子內親 亦起兵北國應之尊氏聞而走近江明

山名師義 年甫十四從父時氏追擊鹽冶

道靜建德二年卒

國守護後薙髮号

高貞正平七年從義詮犯男山遂進陷

之初尊氏以若狹今積莊許與師義而

亥未果尊氏卒至是師義以男山戰功

欲得其地屢造請佐々木高氏高氏每

不出見師義怒馳還伯耆具告時氏與

俱決謀歸順後與時氏共降義詮時氏

卒為伯耆丹後守護小侍所

薙髮号道興天授二年卒

文學

山田御方 魏司空王日俊也初為浮屠學

肆慶雲中嘉學術賜布穀養老中進從

五位上擢明經第一博士六年坐職詔

曰云後至

大學頭

大倭長岡 神知津彥命後也長岡少好刑

請益多所發明當時言法令者皆就質

之為大倭國造養老中藤原不比等重

撰律令長岡刪定二十四條賜功田宝

字初傳功田於子累遷河內守為政苛

刻吏民患之罷官就第又為右京大

夫景雲二年進正四位下明年卒

陽候真身 其先出自隋煬帝後達率陽候

令賜功田天平初勅授第子二人習漢

弘仁元年
二年
三年
四年
五年
六年
七年
八年
九年

王
源貞姬
源潔姬
源全姬
源善姬
源更姬
源若姬
源神姬
源益姬
源高姬
源容姬
源吉姬
源密姬
源容姬
源貞姬
源年表

十二
十一
十四

奉勅檢察遷但馬守至從五位下。室字初傳功傳於子。

矢集蟲麻呂 伊香色雄命後也。養老中。與刪定律令。尋為明法博士。以

學優選為師範。其監屋古麻呂並賜絕。絲布銀。又賞刪定之勞。賜功田。天平中。歷大學頭。室字初傳功田於子。

山田錄 養老中。與刪定律令。為明法博士。兼主計助。出為河內守。錄明律令。後學法律者推為準的焉。

大倭小東人 養老中。與刪定律令。賜功田。天平中。為刑部少輔。坐藤原廣嗣事。左遷。踰年召還。為西海道巡察使。勝室中。遷參河守。

歌人

山部赤人 以和歌聞。與神本人麻呂齊名。稱曰山部論者。以為人麻呂難

五赤人上。赤人難立。人麻呂下。神龜初。從駕紀伊。天平中。陪吉野離宮。應制詠歌。嘗詣春日。至神岳浴。伊與溫泉。遊辛荷鳴。敏馬浦。又東遊望不盡山。所詠歌為世所稱。

孝子

倭果安 大和漆下郡人。孝于父母。友于兄弟。和銅七年。旌孝義。終身勿事。

矢田部黑麻呂 武藏入間郡人。事父母至孝。寶龜三年。免其戶役。

列女

夜叉女 義朝嘗病。美濃青墓長。大炊家。嬖其女。延壽生一女。即夜叉也。及賴朝被執。夜叉啼泣。欲與兄同被刑。乃將走出。眾諭止之。後竊赴水而死。年十三。

○麻部

朝臣

的戶田宿禰 初名有人。宿禰。應神十六年。從平群木免師。兵討新羅。仁

德十一年。射高麗所貢鉄盾的。而洞帝嘉其善射。改賜今姓名。後又使于新羅。

正躬王 萬多親王子也。幼而聰穎。入大學。讀史漢。善屬文。年十八。舉文章生。試及第。為丹波守。政尚清簡。民不敢欺。貞觀五年。卒于官。年六十五。

義烈

真根子 壹岐直祖也。應神帝九年。武內宿禰在筑紫。以諛獲罪。真根子以貌肖大臣。請以身代。即伏劍而死。武內感愴。慟哭。至京師。以訴冤。事得解。

淳和天皇 后妃 皇后 皇后 女御永原氏 女御橘氏 子 大野鷹子 橘姫子 丹輝池子 清原春子 皇子 恒世親王 廢太子恒貞 恒親親王 基貞親王 良貞親王 皇女 氏子內親 有子內親 王

列女

眞玉主賣宣岐鳴壹岐郡人。年十五。夫亡。自誓遂不改嫁。寶龜四年。賜爵

一級。并免田租。終其身。

計部

朝臣

氣比氏治稱三郎太夫。越前人也。為氣比社大官司。方車駕再幸。延歷

寺。氏治築城。敦賀。為官軍聲援。義負奉太子。至敦賀。氏治與子齊晴。以兵迎入

金碓城。戰却敵兵。城陷。尊良親王自殺。氏治殉死之。齊晴奉太子游海。送荒木

浦。復游還城。自刎而死。

歌人

慶雲乃淨辨子也。叙法印。與父齊名。正平中。後光嚴院。使為定撰。新千載集。採

慶雲歌四首。慶雲大悅。詣謝為定。後聞收泰尋歌十餘首于集中。心不平之。竊

刪去已歌而不存。

本朝年代人物掌覽前編上

眞子內親 王 寬子內親 王 崇子內親 王 同子內親 王 明子內親 王 統忠子 年表 天長元年 二 三 四 五 六 七 八 九 十

明治六月十旬出采
六年改采出靜聲為

